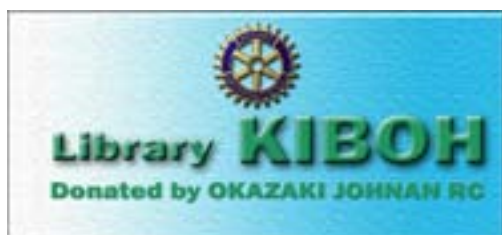


**International Service** encompasses actions taken to expand Rotary's humanitarian reach around the globe and to promote world understanding and peace.



**World Community Service (WCS)** project is created when Rotary clubs from two or more countries unite to serve one of their communities.

The education support program in Myanmar since 1999



# ミャンマー 教育支援プログラム

国際奉仕・世界社会奉仕(WCS)事業報告書



第2760地区 三河中分区  
岡崎城南ロータリークラブ



RI World Community Service (WCS) のロゴ

## 目次

ミャンマーの概要	4
ミャンマー教育支援プログラム	5
1999年・第1回WCS活動事業報告	5
2000年・第2回WCS活動事業報告	6
2001年・第3回WCS活動事業報告	6
2002年・第4回WCS活動事業報告	8
2003年・第5回WCS活動事業報告	9
2004年・第6回WCS活動事業報告	10
2005年・第7回WCS活動事業報告	11
2006年・第8回WCS活動事業報告	12
2007年・第9回WCS活動事業報告	15
2008年・第10回WCS活動事業報告	17
2009年・第11回WCS活動事業報告	18
2010年・第12回WCS活動事業報告	19
2011年・第13回WCS活動事業報告	20
2012年・第14回WCS活動事業報告	21
2013年・第15回WCS活動事業報告	22
ミャンマー支援Q&A	25
感謝とお礼	30
ミャンマー教育事情	31
ミャンマーの仏教と僧院学校	32
奨学会KIBOHの設立	33
私設あおい奨学会について	37
——(ミャンマー紀行文集)——	43
「微笑みの国」ミャンマー訪問記	44
「驚き?」そして「感動」	45
ミャンマーの呼吸	46
ミャンマー訪問記	47
ミャンマー旅情	50
行ってきましたミャンマーへ	51
I Love Myanmar. I Love Magway.	52
ミャンマー紀行「遺産」	53
11回目となるミャンマーを訪問して	54
ミャンマー「モノより人への援助」	55
我が城南RCの国際奉仕・世界社会奉仕プログラムだ	56
ミャンマー・2013年の様子	58

# ミャンマーの概要

**国名:** ミャンマー連邦国 (Union of Myanmar)  
**首都:** ネピドー (Naypyidaw)  
**面積:** 約68万平方キロメートル (日本の約1.8倍)  
 バングラデッシュ・インド・タイ・ラオス・中国の5ヶ国と国境を接し、ベンガル湾・アンダマン海に面している。  
 ミャンマーは7つの州と7つの管区に分けられている。  
**人口:** 約6,500万人  
**民族:** 主な民族としては、カチン族・カヤー族・カレン族・チン族・モン族・ラカイン族・シャン族・ビルマ族等となります。  
 細かく分類すると135民族になるといわれている  
**宗教:** 国民の約80%が仏教徒。その他少数ではあるが、イスラム教、ヒンズー教等。  
**言語:** ミャンマー語が公用語  
**時差:** 日本より2時間30分遅れ。

**通貨:** 通貨単位はチャット  
 公式レート US\$1= 6 kyat(チャット)  
 実勢レート US\$1=860 kyat (2012/9)

**気候:** ミャンマーでの気候は3シーズンに分かれます。  
**【暑期:** 2月下旬~5月中旬  
 昼間40℃以上  
**【雨期:** 5月下旬~10月中旬  
 スコールで道路冠水も  
**【乾期:** 10月中旬~2月中旬  
 旅行最適シーズン

**習慣:** 仏教国ミャンマーでは、寺院と僧侶は神聖で絶対な権威をもつものです。寺院の見学の際は、敬虔な態度で、僧侶に触れたり、握手をしたりする事は厳禁です。又、寺院に入る時は必ず裸足にならなければなりません。



**識字率:** 85.3%(15歳以上) ※アジアの中では高い方  
**平均余命:** 男61.17才 :女65.74才  
 平均63.39才(2009年現在)  
**その他:** 水道水の水は飲めませんのでミネラルウォーターを購入して飲む。クレジットカードは、高級ホテル等使える場所が限られます。トラベラーズチェックはほとんど使えない。外国人は米ドル使用。

名前、姓がなく、名のみ。

現在、民主化が進み大きく変化している国であるが、まだまだ、貧しい国民が多くいることを忘れてはいけない。

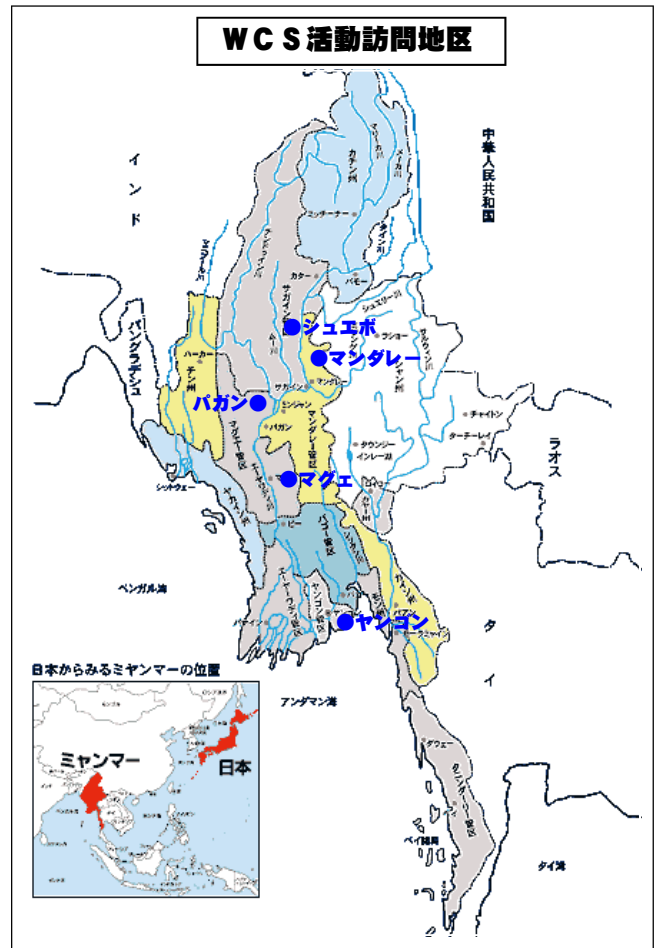


## アクセス

原則として、ミャンマーへは空路での出入国のみ可能です。日本からミャンマーを訪れる際には、直行便はなくバンコク、または台北乗り換えの便を使うのが一般的。  
 日本からバンコクまで約6時間。バンコクからヤンゴンまで約1時間程度。

## ザガイン管区シュエボ

1. 人口 約80,000人
2. 高校 3校
3. 中学 2校
4. 小学校 14校
5. 面積 1,054.7平方キロメートル
6. 主な業種 農産物、織物、陶器等の生産売買、運送
7. 産業 殆ど農業(米、野菜、砂糖キビなど)  
(米は有名。銘柄「シュエボ・コンニ」)
8. 観光地 無し
9. 位置 マンダレーより北150km(車で約3時間)
10. 図書館 公・私立図書館は、今までに一切無く住民からの要望で当クラブが建築した。
11. その他 ホテル・スーパー・娯楽施設は、一切ない。



# ミャンマー教育支援プログラム

## いきさつ

1997年当クラブがミャンマーからの留学生キョーキョーモー(Kyaw Kyaw Moe)君を、米山奨学生として2年間受け入れました。カウンセラーは、会員の太田政信君。名古屋大学大学院在学中の彼は、この奨学金を得て一般的には4年かかる博士号取得を、努力の結果なんと3年間で取得いたしました。当クラブが世話をしている数多く奨学生の中で初めての3年で博士号取得の優秀な学生でした。

その彼が、卒業後一時帰国をしようとするので、ミャンマーがどのような国か、この優秀な奨学生の故郷を訪ねてみよう、当時の国際奉仕委員会(当時：小野智範委員長)から提案がありました。そこで「ロータリークラブで行くなら単なる観光旅行では意味がない。奉仕に結びつけよう」と意見が出て、この訪問を当クラブのWCS活動に含めた事業に拡大し、1999年教育支援プログラムとして位置づけ国際奉仕事業として理事会承認されました。



Dr. キョーキョーモー氏

## 経過

本来RIにおいては、WCS活動は、その国のRCと連帯し行う奉仕であります。第2760地区では、地区事業としてWCS活動を実施しています。つまり地区内の各クラブは、WCS予算を地区に送り、地区がスケールメリットのある国際奉仕事業を行っています。ところが我々の目的国ミャンマーにはRCはありません。ですからこの奉仕活動は地区に認められない活動になり、RCとしての奉仕活動上大きな壁が生じることとなりました。しかし1999年近藤敬道会長(当時)の熱意ある奔走で、地区からこのミャンマー教育支援事業が当クラブ独自の公式WCS活動として認められることとなりました。

そこで「何故ミャンマーなのか？」という問いがあります。まず、海外に目を向けるとアジアには、多くの後進国がありますが、このWCS活動に対する限られたクラブ予算



を有意義に使用するためには、やはり為替格差と経済格差の大きい国の方が、より有効的であると議論され結論的には国連の指定する最貧国ミャンマーを支援対象国と決めました。第1・2回目は旧首都ヤンゴンにある高校にこのプログラムを実施。そして次第にミャンマーの状況も理解出来はじめ、日本円の実勢価値がミャンマーでは10-20倍もあることが分かりました。しかもミャンマー国内の地方に於いてはそれ以上の価値の差がありました。また、一般的にミャンマーに関する情報は少なく、他のクラブ(全国)も殆どこの国を対象にしていない状況もあり、「少ない予算」で「大きな奉仕」を目指すには適切な対象国という意

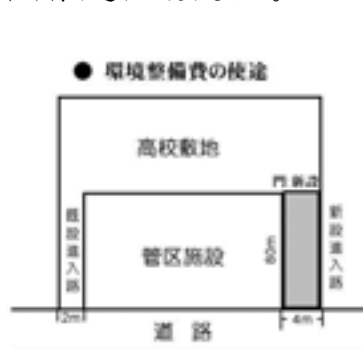
見が多数を占めることとなりました。尚、ミャンマーの高校はすべて公立高校ですが、日本と国情が異なり、国や管区・州より学校施設管理のための費用には、ほとんど予算もなく、卒業生や父兄が修理費や管理費などの資金を集めを行っている状況も把握できました。

2001年より奉仕対象の学校を地方の学校に変更しました。地方ほど教育環境整備も行き届かず、現地子供達も支援を切望しています。あるとき元奨学生キョーキョーモー氏は、「将来自国で元奨学生を集め、RCを設立する夢」を語ってくれました。そんな時は当クラブが、全面的な支援が出来ればと希望(KIBOH)します。併せて、当クラブの全会員の理解のもと、会員個々の全面的な支援と協力によりこの事業が長期間継続していることに感謝申し上げます。この紙面を借りて重ねて御礼申し上げます。

## 第1回WCS活動事業報告

- ◎事業内容 教育環境整備資金の寄付
- ◎対象校 アローン第5高校  
所在：ヤンゴン管区ヤンゴン
- ◎寄付金の使途 高校敷地への進入道路整備
- ◎寄付金額 \$2,500
- ◎実施時期 1999年1月23～28日
- ◎派遣会員 小野智範(国際奉仕委員長：団長)  
太田政信 中根常彦  
則竹國雄 小林通利  
杉浦節雄 天野賢一
- ◎同行者 キョーキョーモー

第1回目は、教育支援プログラムとして理事会承認されたヤンゴンにあるアローン第5高校に教育環境整備資金US\$2500を送り、その資金は、道路建設にあてられ学校の取り付け道路が設けられた。



派遣前に現地と連絡を取り我々の寄付金の使途目的を決めて欲しいと伝えたとこ是非この道路建設を実施したい旨の要望があり、クラブとして採択したがこの金額(約30万円相当)で本当に4m×80mの

道路が出来るか一抹の不安も有ったことは事実です。さて、このアローン第5高校は、ヤンゴンでも優秀な生徒が多いのですが学校施設面では、校舎は古く2階の講堂は老朽化が激しく全く使用できない状態であった。また今回の目的である進入道路の整備については、前面道路との接道が幅2m程度で、緊急避難の場合にも支障があり、自動

車も敷地内に入りづらく、緊急車両が楽に進出でき、正門のある道路建設を願っていたところだったようです。

さて、高校側も当初、我々のこの寄付の申し出に驚き、教育委員会等上部機関に相談したようで、それが上層部に上がり当日には軍服姿の文部事務次官も寄贈式に出席することとなり、緊張の中で寄贈式典が開催されました。予想外の厳粛なこの式典で無事寄付金を渡すことが出来ました。校長より2000年2月までにはこの道路も工事完了するので再度来て欲しいとの要請を受けました。尚、当日地元テレビ局も取材があり後日テレビ(国営)で放映されたとの連絡があったようです。我々も初めての訪問でこの国に対しいろいろ驚きの連続でありました。



整備された道路と正門。門にはロータリーバッジ



回の訪問時、天井にはロータリーバッジが掲示されていた。

派遣会員は首都ヤンゴンでなく、もっと地方の方が我々の持参する寄付金がより役立つのではと、意見が一致し対象地を次回より再考することとし、寄付金使途も環境整備でなく、より教育支援になる施設を模索することとなった。

尚、今回寄付式典には、軍人でなく文官の文部事務次官(軍服ではない)の臨席がありました。この次官はなんとロータリークラブを知っていて、若い頃ロータリーの世話になったの言っていたが詳しくは話さなかった。

また、メンバー有志で作る私設奨学金制度研究のためヤンゴン第2医科大を訪問しタラシュエ学長と面談、医学生の実生活など聴聞し大いに参考とした。その際会員一同は、この大学にある奨学会基金に個人総額\$500の寄付を行った。

## 第2回WCS活動事業報告

- ◎事業内容 教育環境整備資金の寄付
- ◎対象校 アローン第5高校  
所在：ヤンゴン管区ヤンゴン
- ◎寄付金の使途 教室兼講堂改修
- ◎寄付金額 \$2,500
- ◎実施時期 2000年2月11～17日
- ◎派遣会員 中根常彦(国際奉仕委員長:団長)  
太田政信 小野智範 近藤正俊
- ◎同行者 Dr. キョーキョーモー
- ◎その他 派遣会員の個人寄付  
ヤンゴン大学へ \$100  
ヤンゴン第2医科大へ \$500

第二回目は、第一回目と同じアローン第5学校へ寄付。この寄付金は教室兼講堂改修費に当てられ、数十年ぶりに講堂の利用が可能になるとのこと、教育施設が充実されます。尚、同校はヤンゴンの名門公立高校であるが、前記の教育施設に対し行政からの予算措置は十数年前からほとんどなかったようです。

改修工事は、校舎二階の約40坪程度の講堂で床、壁及び天井の大改修であったようだ。工事業者は卒業生が安く請け負い寄付金額内で施工できた。今



## 第3回WCS活動事業報告

- ◎事業内容 教育環境整備資金の寄付
- ◎対象校 シュエボ第1高校  
所在：ザガイン管区シュエボ
- ◎寄付金の使途 第1図書館建設費用(半額分)
- ◎寄付金額 \$2,000(図書館建設用)  
\$1,000(会員外から寄付:図書購入費)
- ◎実施時期 2001年2月1～8日
- ◎派遣会員 則竹國雄(WCS委員長:団長)  
小野智範(会長エレクト)  
中根常彦(副幹事)  
太田政信 近藤正俊 加藤義幸
- ◎同行者 Dr. キョーキョーモー夫妻
- ◎寄贈品 文房具、子供用衣類ダンボール箱6個

第3回目の訪問では、ミャンマーの北部にある第2の都市マンダレーから北部へ150kmにあるザガイン管区シュエボを訪問。この町は人口約8万人の農村地帯です。

この地域には地区にも学校にも図書館が無く、是非、図書館を建設をしたいという地元の厚い要望があり、クラブWCS活動費から2000ドル(クラブ予算の関係上、図書館建設資金の半額分。次年度同額を寄付する約束で)、非会員ではあるが野島達夫弁護士からの寄付金1000ドル、計3000ドルと、文房具・古着などを贈った。

当時、本当に4,000ドルで図書館が建築できるのだろうか？  
現実に建築してくれるのだろうか？との不安もありましたが、  
結局地元シュエポのボランティアグループの協力を信頼することとした。

前回の第2回目訪問時に、訪問会員有志から「他にチャ  
ンマーのために何か援助出来ることはないだろうか？」  
「何かしよう！」との発案で、クラブの寄付は環境整備資  
金だから、「人づくり」の面に目を向けることとなり、私  
設奨学金制度「あおい奨学会」が創られ、この年、2名の  
高校生（高校卒業後、大学に進学）に奨学金を支給した。  
背景には、大きな為替格差が利用できるメリットがある。  
そして、この3回目の訪問で地方の学校は、ほとんどが小、  
中、高の併設校で3部制を行っていて、図書館は高校に限定  
しなくても十分活用されることになることも解ってきました。  
加えて高校側に、学校に行けない経済的に恵まれない  
子供達へこの図書館の開放と建物等の管理の確約を得るこ  
とが出来ました。

尚、この地方は観光地でもなく農村地帯ですので観光客も  
ほとんど無いため、日本人が立ち寄ったのは40数年振り  
で、初めて日本人を見た人々も多く、我々は地元住民から  
意外に温かく歓迎された。後で聞いたが反日感情はあまり  
ないようだ。

また、このシュエポ地域に入ったとたん突然、警察官の乗  
った警察車両2台が我々の警備が付き全員驚きであった。  
我々が図書館建設資金の提供をすることは既に住民達は知  
っており、多くの住民は車の中の私たちに手を振り挨拶を  
してくれた。式典には管区の軍司令官(知事に相当)行政関  
係者、警察や地元の有力者、教育関係者らが多数が参加  
し、子供達の歌や踊りも披露され、予想外の盛大さと長時



シュエポ 中学生の下校時風景



民族衣装を着た中学生が出迎え。一同感激



制服の政権関係者

間の式典に、我々は些か恐縮した。その式典終了後ボラン  
ティアグループからある湖畔の施設で夕食の招待を受けた。

又、式典ではこの図書館建設に、地元からも寄付を募る件  
の報告があった。我々の資金のみでは無理なようだ。  
このシュエポには、外国人の宿泊できるホテルもないため、  
我々は日帰りでマンガレーに宿泊することとなるが、道路の  
整備が最悪でバス2時間半の帰路であるが、日本の6時間に相  
当する疲労を感じたことを申し添えます。



※写真右上が図書館建設予定地



式典の様相 子供達の日本語の歌で歓迎される



今回図書館建設にお世話になる地元ボランティアの婦人団体幹部

## 第4回WCS活動事業報告

- ◎事業内容 教育環境整備資金の寄付
- ◎対象校 シュエボ第1高校  
所在：ザガイン管区シュエボ
- ◎寄付金の使途 第1図書館建設費用(残額金)
- ◎寄付金額 \$2,000 (図書館建設費)  
\$1,000 (図書購入費)
- ◎実施時期 2002年2月28日～3月
- ◎派遣会員 小野智範 (会長)  
中根常彦(幹事) 近藤正俊 (副幹事・団長)  
太田政信(会長エレクト) 田中暉登
- ◎同行者 Dr. キョーキョーモー夫妻
- ◎寄贈品 文房具、子供用衣類ダンボール箱23個

この第4回目訪問は昨年の建設資金残額金を寄付する目的です。このシュエボは2回目になるので昨年のような緊張感もなくまた、図書館建設状況も事前に郵送で写真など届いていたので安堵感もあり、派遣会員は少しリラックスしている。

シュエボ第1高校へ図書館建設費の不足分と図書購入資金として1000ドルを寄贈、地域住民の協力のもと、図書館が完成していた。実際の建設総工事費は材料費約\$4,500で、工賃は地元民の大きな奉仕があったようです。シュエボ管区軍司令官、行政関係者出席のもと、盛大な開館式が行われた。この図書館は「希望KIBOH」と名付けられ、木造平屋建て、床面積約150㎡ 2部屋で、地域にも解放され、地元で喜ばれていた。



第1図書館KIBOH 完成:2002年1月



小野会員は汗だくで書きました。

全校生徒が整列してお出迎え、我々は少し照れながらの行進です。



そのほか、数ヶ月前にクラブ会員および会員外から集めた古着、文房具など260kgの寄贈品を船便で送り、現地ボランティア団体に委託、恵まれない子供達にも配られた。特に寄贈品の中で藤江顕治君より寄付された多数の子供体操服は、非常に喜ばれ、一部は地元の小学生サッカーチームのユニフォームにもなったと聞いています。



会員寄贈の体操服でニコリ



開館式は盛大でした。テープカット！



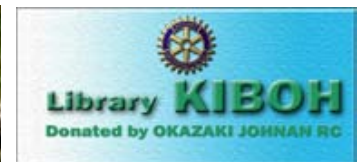
可愛いチビッコも出迎え



図書館前は盛り上がっています



第1図書館前



図書館KIBOHのプレート



小学生の歌と踊りもありました





## 第5回WCS活動事業報告

- ◎事業内容 教育環境整備資金の寄付
- ◎対象校 シュエボ第2中学・青少年成育センター  
所在：ザガイン管区シュエボ
- ◎寄付金の使途 第2図書館建設費用・一般寄付
- ◎寄付金額 \$ 4,000 (図書館建設用)  
\$ 700 (青少年成育センター)
- ◎実施時期 2002年11月25日～12月1日
- ◎派遣会員 太田政信 (会長)  
近藤正俊 (幹事：団長)  
中根常彦 加藤義幸 細井正治
- ◎同行者 Dr. キョーキョーモー
- ◎寄贈品 文房具、子供用衣類ダンボール箱4個

第3, 4回と同じくシュエボ地区のシュエボ第2中学校の要請により第2館目の図書館KIBOHを建築するため5名の会員を現地に送り直接、ボランティア団体に4000ドルの建築費を今回は一括で手渡しました。これは、地元との信頼関係も出来、また建築資材が一括購入の方が相当安くなるとの情報もあったためです。

(前回までは建築資金を2回に分割して渡していました)  
昨年建設した第1図書館の使用状況も確認、小野智範会員揮毫の看板も表装され掲示されていました

また今回は孤児や貧困家庭の子供42名を預かっているYDC (青少年成育センター) からの招待もあり、会員達はそこにも訪れ、メンバーから集めた文房具衣類など募金から使途を定めない700ドルを寄付した。公的施設ですが半ば自給自足の運営で資金はわずかの予算と地元の寄付で運営しているとのこと。



第2図書館KIBOH 完成:2003年7月



第2図書館の寄贈図書



建設場所視察(写真の左側) 2002.11.26撮影



寄贈品をボランティア団体へ



学校から記念品受領



着飾った小学生たち



外には地元の子供達が大勢

YDCの敷地内には家畜や農地があり子供たちが自らに働き食料を得ているとのこと。ここから学校に通い生活しているようだ。内部は清潔ですが、子供らしいもの玩具や本は一切ない。



YDC内の様子。身寄りのない児童生徒が共同生活



子供達の私物はほとんどありません

## 第6回WCS活動事業報告

- ◎事業内容 教育環境整備資金の寄付
- ◎対象校 北ダゴン第1高校  
所在：ヤンゴン管区ノースダゴン
- ◎寄付金の使途 第3図書館建設費用
- ◎寄付金額 \$ 4,000 (図書館建設用)  
\$ 1,000 (非会員寄付：図書購入費用)
- ◎実施時期 2004年2月12～16日
- ◎派遣会員 加藤義幸(国際奉仕委員長)  
市川聰明(WCS委員長)  
近藤正俊(団長) 太田政信 中根常彦  
田中暉登 市川藍(市川会員令嬢)
- ◎同行者 Dr. キョーキョーモー
- ◎寄贈品 文房具、子供用衣類ダンボール箱6個

2004年には、ヤンゴン管区北ダゴンにある北ダゴン第3高校に第3館目の図書館を寄贈（建設費4000ドルと図書購入費1000ドル）するため6名の会員を派遣した。尚、この図書購入費\$1,000は、クラブメンバーではない弁護士の野島達夫氏から寄付を受けました。さて、今回、物価高騰が続いている現地で、前回と同額で同等のものが建築できるか、担当者は、少し心配をしていたが、地元の支援者などの協力を得て建築を開始し、我々帰国後の2004年10月末にはこの第3図書館が完成しました。この北ダゴンは、ヤンゴン郊外にありヤンゴン中心部より北東部、車で約40分の所。首都ヤンゴンに近いが予想に反するほどのローカルエリア。

ここも首都圏内にも関わらず同地区には図書館はない、同校は中学・高校の併設校であるが、地元の貧困により小学校に行けない子供達にも開放するよう学校長および教育関係者に要請し快く快諾を得た。又この建設のためわずかですが、地元にも雇用も生まれます。



右の軍服姿の方が、文部大臣。

また、同年4月には、現地より突然、文部大臣(軍人)自らこの場を視察されたという連絡があった。これは、高校の校長よりの図書館建設に関する報告が教育委員会へ提出され、これが文部大臣まで上がり急遽、民間レベルの支援がどのようなものなのか、大臣が見てみたいとのことで視察が実現された。その際大臣個人としてセメント、ブロックの寄付の申し出があったことも聞きました。(ブロック工事は終わっていたので気持ちだけいただいたそうです)



写真左が図書館建設管理者、ウテンモウー氏緊張して、文部大臣に経過を報告しています。

ミャンマーの雨期は5月から10月で、この間基礎工事や塗装工事は出来ない。そのため乾期にそれらの工事をする事となり、工期は長く日本感覚では理解できないほどのです。



建築中の図書館



第3図書館KIBOH



第3図書館KIBOH 完成：2004年10月



野島文庫(寄贈：野島達夫氏)も間違いなく設けておりました



城南RCにより寄付されたと記してあります

## 第7回WCS活動事業報告

- ◎事業内容 教育環境整備資金の寄付
- ◎対象校 シュエボ第2高校  
所在：ザガイン管区シュエボ
- ◎寄付金の使途 第4図書館建設費用
- ◎寄付金額 \$ 4,000 (図書館建設用)  
\$ 1,000 (図書購入費用)
- ◎実施時期 2005年2月3～7日
- ◎派遣会員 牧野正高(国際奉仕委員長)  
近藤正俊(団長)  
太田政信 田中暉登  
市川聰明 市川藍(市川会員令嬢)  
牧野暁世(牧野会員令嬢)
- ◎同行者 Dr. キョーキョーモー氏
- ◎寄贈品 文房具、子供用衣類ダンボール箱7個

今回のシュエボ訪問は、一昨年寄付した第2図書館KIBOHの竣工確認とシュエボ第2高校からの要望で4館目の図書館を寄付する目的です。会員4名とその娘さん2名が参加。

この寄贈する第4図書館については、昨年度同様、地元との信頼関係が構築されているため理事会承認を得て2004年10月事前に建設資金を現地に送り、この我々が訪問するとき迄に建築工事完成を地元の建設資金管理者に依頼いたしました。



第4図書館KIBOH 完成:2005年2月

2月には約束通り今までの3つの図書館中で一番立派に完成していました。この訪問時、現地関係者より政府の法律や方針が変わり、外国人の支援による事業は、全て政府を通すよう通告されたが、今回に限り継続事業のため何とか完成できたとの報告がありました。つまり今後はこの事業にミャンマー政府の介入があるようです。この第4図書館の玄関柱には ロータリーマークとDonated by Okazaki Johnan Rotary Club の彫刻が刻まれ、又室内にはロータリーバッジが、はめ込まれていました。(地元からの寄付が若干多く集まったようです)

メンバーや会員外の理解者、そしてミャンマー現地関係者の多くの協力を得て建てられた4棟の図書館が、今、高校生や小中学生そして、学校に行けない経済的恵まれな子供達にも有効に利用されています。



玄関の柱に刻まれていた。

Donated By Okazaki  
Johnan Rotary Club  
04.2.2004



窓には手作りのロータリーのバッジがはめられて



寄贈式典の様子 テープカットもありました



図書館の前には鼓笛隊とチアリーダーが集まっていた

## 第8回WCS活動事業報告

- ◎事業内容 教育環境整備資金の寄付
- ◎対象校 マグエ第1高校  
所在：マグエ管区マグエ
- ◎寄付金の使途 第5図書館建設費用
- ◎寄付金額 \$ 4,500 (図書館建設用)  
\$ 1,000 (図書購入費用)  
\$ 780 (文房具購入)
- ◎実施時期 2006年2月1～8日
- ◎派遣会員 加藤豊生 (副会長)  
近藤正俊 (WCS委員長、団長)  
田中暉登 中根常彦  
天野邦彦 岡田吉生  
市川聡明 市川麻耶(市川会員令嬢)
- ◎同行者 Dr. キョーキョーモー
- ◎寄贈品 文房具 (ノート、ボールペン各4000個)  
子供用衣類ダンボール箱7個

2005年5月当クラブにマグエ第1高校の校長、教師、生徒より図書館の建設に対し熱い要望書が届いた。それにより当委員会から第5館目の図書館建設をクラブ理事会に要請し、承認を得た。同年7月には第3図書館の建設資金管理者ウテンモウ氏が第5図書館の建設資金管理者としての要請にも快諾いただき、また8月彼がプライベートでミャンマーより来岡したので、藤江会長がクラブ例会に招待し交流を深めた。この建設費は理事会承認の元、9月には現地へ一括送金され、委員会の目標である第5図書館の建築の実現が可能となった。

2006年2月2日訪問団8名はヤンゴンからバガンへ向かい、翌日バスでマグエ管区マグエに向かう。当クラブにとって初めて訪問するところでバスで当初3時間の予定であったがバスのエンジンが良くなく、スローペースのためなんと5時間を要した。しかし同行者が途中で現地高校へ電話連絡を取っていたので心配を掛けずに済んだ。

やっと目的地マグエ第一高校の正門に到着、学生達2,000余名が我々のため整列して歓迎してくれた。その後完成した第5図書館 KIBOHの前で植樹式と鍵の授与式が行われた。その前に教師など学校側で井戸を掘ったが、給水ポンプ、給水タンク及び給水配管設置への支援要請を受けた。今後の協議対象のなろう。

さて今回の図書館などの寄贈式は、こちら側から事前に時間がないうえ、なるべく簡略化して欲しい旨の要請をしておいたので数十分で終了。学生達の暖かい送迎を受け急ぎ帰路に就く。

帰路の途中、地元の要請でマグエ第1小学校を視察、老朽化した校舎と椅子・机が不足している実情を見た。しかし学校側では井戸が一番欲しいと言っていた。現在、学校では飲み水の確保がなされていないとのこと、この案件も後日協議の対象となろう。

また、インフレのため今までと同じ規模の図書館建設には



バスは、高校玄関前に到着

高校生の歓迎を受ける



小学生も多かったです。併設校で生徒数3000名とのこと



第5図書館KIBOH前で



図書館の鍵の授与式

図書購入費の寄付



\$4,500では、来年は建築できないとの情報提供があり、今後、我々の大きな検討材料となった。

ミャンマーは、地方に行くほど庶民の生活レベルは低く、又、教育にも国からの予算は少ないため、学校施設は、地元住民、卒業生や父母の支援と協力で維持しているとの話を聞いた。税金以外にもかかる住民の大きな負担であろう。だが子供達のために・・・。



## 図書購入の証拠写真

2006/02/03 当クラブがマガエ第1高校（小中高併設校）に寄付した\$1,000で、購入された書籍の証拠写真。

※2006/3/31 現地協力者ウテンモーウー氏より郵送されてきました。信頼できる協力者だ。

写真（下）左端の女性が、タンタンヌエ校長。



# 岡崎城南RCのWCS活動が、ミャンマーの有力新聞「ヤンゴンタイムズ」の紙面に大きく報道された。

2006年2月23日記事



(翻訳)

## 日本からマゲエ第一高校に図書館を寄付

2006年2月23日記事掲載 於：マゲエ 2月2日マゲエ第一高校で、日本の岡崎城南ロータリークラブからこの高校へ第5 KIBOH 図書館、家具、書籍、文房具、子供用衣類寄付を受ける式典が行われた。

この寄贈式で、現在日本に住んでいるキョーキョーモー博士は、自分が日本で博士課程勉強中ロータリークラブから奨学金を貰ったこと、ロータリークラブは世界160カ国以上に存在すること、ロータリークラブは教育に関する支援を行っていることなどや、今回、この岡崎城南ロータリークラブの活動は1999年から始まり、今まで、ヤンゴン・アローン第五

高校、北ダゴン第一高校、シュエボ第一高校、同第三高校、同第二中学校に4館の KIBOH 図書館を寄付した。その上、マゲエ医科大学の奨学生達へ奨学金を援助していることを説明した。その後、岡崎城南ロータリークラブの副会長加藤豊生氏から校長タンタンヌエ先生に KIBOH 図書館の鍵が渡され、また併せて図書館に必要な書籍、文房具、子供用衣類など寄付を受けた。

この KIBOH 図書館は5000ドルの寄付金で建設された。また図書館のための図書購入費は1000ドル分である。

(翻訳：キョーキョーモー氏)

## 第9回WCS活動事業報告

- ◎事業内容 教育環境整備資金の寄付
- ◎対象校 マグエ第1高校  
所在：マグエ管区マグエ
- ◎寄付金の使途 給水施設整備費用
- ◎寄付金額 \$ 4,000 (給水設備工事費)  
\$ 1,000 (文房具購入費)
- ◎実施時期 2007年2月9～15日
- ◎派遣会員 近藤正俊 (副会長・団長)  
千賀邦二 (国際奉仕委員長)  
小林通利 (WCS委員長)  
太田政信 市川聡明  
奥谷 博 小林会員の奥様と息子
- ◎同行者 Dr. キョーキョーモー
- ◎寄贈品 子供用衣類ダンボール箱6個 (藤江氏寄贈)

2006年2月当クラブがマグエ第1高校に第5図書館を寄贈した際に、教師など学校側で井戸を掘ったが、給水ポンプ、給水タンク及び給水配管設置への支援要請を受けた。当クラブはその要請に応えミャンマー訪問9回目となる今回は、ポンプ室、揚水ポンプ、高架水槽、給水配管、浄水装置などの給水施設を寄贈することとなった。

2月11日、マグエの学校関係者をヤンゴンに招待し、この井戸の寄贈式を行い、この井戸は「KIBOHの泉」と名付けられた。また、この給水施設工事の手配及び管理は、モー氏後親ウテンモウー氏の全面協力により完成の運びとなったことを報告しています。

このマグエ地区は、乾燥地帯で井戸は約60m以上掘らないと水が出ないとのこと。また、水が出てもその井戸水は飲用に適さない場合が多い、つまり石灰質を多く含む硬水で浄水装置が必要とのことであった。

ミャンマーでは、生水を飲まない習慣があり必ず沸かして飲むようだから衛生面では問題ない。しかし、井戸は少なく、雨水や川の水が水源らしい。それ故、子供達は水汲みに時間が取られ学校に行けない子供達が多いと聞いた。子供達にこの「KIBOHの泉」が役立つことを願うものである。



校長代理の挨拶



文房具寄贈:奥谷会員



子供衣類寄贈：市川会員



## 「KIBOHの泉」完成

ポンプ室と高架水槽



当クラブ名の表示板



新品の揚水ポンプ



新設の水飲み場



浄化装置と飲料用ポリタンク

## 第9回WCS活動事業その後

2007年2月、我々が現地へ赴いた際に、当会員の藤江顕治氏寄贈の子供服をシュエボの協力者キンララモー女史に託した

その後、同女史はシュエボの各地を回り成績優秀な児童で恵まれない子供達を選び、その子供達にこの子供服を配布したとの報告が届いた。よって、その写真を掲載する。

(2007年8月写真受領)



左：キンララモー女史 右：教師



左：キンララモー女史のご主人



サイズは合うかな??



成績優秀な児童たち



12-2月は寒い日もあるようです。



嬉しそうな子供達





## 第10回WCS活動事業報告

- ◎事業内容 教育環境整備(道路整備)
- ◎対象校 シュエボ第1高校  
所在：ザガイン管区シュエボ
- ◎寄付金の使途 道路整備費
- ◎寄付金額 \$ 4,500
- ◎実施時期 2008年1月
- ◎派遣会員 0名(派遣中止)

本年はミャンマー国内情勢の悪化で会員の派遣は見送った。2007年秋ガソリンの高騰から端を発し、僧侶がデモをするような大規模な民主化運動が巻き起こり、国軍がそれを鎮圧したが日本人記者が射殺される事態となった。

しかし、そんな状況下にこの事業を継続すべく現地協力者の努力で我々の支援活動は達成できた。シュエボ第1高校は小中高の併設校で生徒数2500名という大きな学校である。その敷地内道路が雨季には頻繁に冠水し、特に小学生達にとってこの道路冠水で学校付近に着いても校舎まで入れないという。このため学校敷地内道路の全てを30cmほど嵩上げし、舗装工事をしたという要望が届いた。そこで本年はこの工事を支援することとなり、2007年11月工事費用を送金をした。現地ではこの道路整備工事を急ぎ、雨季前には完成するよう手配された。

尚、この工事完成については次年度完成確認のため訪れるこ



写真上：採石を敷き詰め 写真下：タールを撒いてある。

写真上：採石を敷き詰め 写真中・下：舗装工事完了後



写真下：文房具を受け取った子供達：写真撮影に緊張します



現地協力者が貧しい家庭の児童を優先して渡した。

## 第11回WCS活動事業報告

- ◎事業内容 教育環境整備工事完成確認  
奨学金の支給
- ◎対象校 シュエボ第1高校  
所在：ザガイン管区シュエボ
- ◎寄付金の使途 クラブ奨学会を創設
- ◎寄付金額 学生2名を奨学生として支援(各年額\$500)  
\$ 1,010 (図書購入費用)  
\$ 1,010 (文房具購入費用)
- ◎実施時期 2009年1月31～2月5日
- ◎派遣会員 近藤正俊 (会長・団長)  
天野邦彦 (WCS委員長)  
岡田吉生 (会長エレクト)  
田中暉登、  
加藤豊生  
市川聡明  
松永茂夫
- ◎同行者 京 幸一(平成20年9月日本国籍取得)
- ◎寄贈品 子供用衣類ダンボール箱7個(藤江氏寄贈)

2年ぶりにミャンマーを訪れた。本年は昨年寄付した道路整備工事完成の確認と奨学金を支給が目的である。この奨学金はクラブ内に創設し、東南アジアにおいて明日の医療活動に貢献できるよう専門教育を受ける機会を作るため、貧しくても優秀な医学生を支援するもので、いわば「人作り」に対し支援活動を方向転換した。今後、当クラブは5年間の継続事業として進めることとなった。

1/31から2/5、第10回目となるミャンマーでの教育支援プログラムを実施した。今回は7名の参加により、昨年ザガイン管区シュエボのシュエボ第1高校へ寄付した道路整備工事の完了確認と奨学会「KIBOH」の奨学金支給を目的に会員有志を派遣した。

岡崎からヤンゴン到着まで乗り継ぎを含め15時間半も掛かる遠い国。亜熱帯地域と言われる所だが、夜は15℃くらいで肌寒く長袖が必要なくらい涼しい。



た第1図書館KIBOHがある。

ここでは多くの生徒が出迎えてくれ、テープカットまで準備してくれた。式典では会員より寄付された図書購入費と文房具購入費の19万円を学校と地元ボランティアグループに手渡し、新奨学生になった4名の学生に奨学金を支給し無事活動を終えた。

翌日朝4時起きて、空路ヤンゴンから北へ700kmのマンダレーに到着。そこから北西方向に向いバスで3時間の車窓を楽しみ、12時に目的地シュエボに着いた。このシュエボ第1高校には我がクラブ最初に建設した



現地協力者からは、今までのように目立つ施設への援助は政府の介入もあり、今後はいろいろな面で支障やそのための許可が必要になってきたので奨学金制度になり良かったと感想があった。

この高校で行った式典も例年、政府の許可が必要で、今回は学校側が非常に消極的で許可申請をせず、それを飛び越えて、現地協力者側が直接許可申請をしたとの情報を得た。その際、過去に当クラブで作成したビルマ語の「広報KIBOH」(写真のもの)を添付し申請したところ、すんなりと許可が下りたと言っていた。

学校側が躊躇するほどいろいろな面で政府から圧力があるようだ。よって、当クラブの「人作り」の方向転換はまさしくタイミングが良かったと感じた。

クラブ全メンバーのご支援とご協力で今回も滞りなく活動が出来、感謝申し上げWCS活動報告と致します。

新奨学生：マグエ医科大1年生



あおい奨学会卒業生で医師：隣村でクリニックを開業



昨年寄付した道路整備工事を確認中

## 第12回WCS活動事業報告

- ◎事業内容 奨学金の支給、図書の寄贈
- ◎寄付金の使途 クラブ奨学会KIBOHの奨学金
- ◎訪問目的 当クラブで設立した奨学会KIBOHより奨学生13名(新奨学生4名含む)に奨学金(総額\$6,900の支給)と当クラブで平成10年より建設寄付した5棟の「図書館KIBOH」へ図書(約800冊：¥73,000相当)を寄贈。
- ◎実施時期 2010年2月11～15日
- ◎派遣会員 近藤正俊(直前会長・団長)  
市川聡明(WCS委員長)  
田中暉登(元会長)  
太田政信  
松永茂夫
- ◎同行者 京 幸一(奨学会カウンセラー)

岡崎城南ロータリークラブは、国際奉仕活動の一環として行っているミャンマー教育支援プログラムの奉仕活動で本年第11回目となるミャンマーの旧首都ヤンゴンへに自費参加したクラブメンバー5名と本奨学会カウンセラーの元ミャンマー人京氏を含め計6名の訪問団を派遣した。

当クラブは過去1998年からミャンマー各地に図書館、給水施設や道路整備など教育支援プログラムを行ってきたが、昨年のクラブ創立20周年を期に奨学金制度を拡充した。この制度はミャンマーの医学生を支援する目的で行っている。

ミャンマーには医科大学は4校しか無く、全国で2600名の優秀な学生しか入学できない。出身地域により入学できる医科大学が指定されている。そこで成績優秀でも貧しさから進学できない学生を支援するため当クラブは、この「奨学会KIBOH」を設立した。毎年2～4名を奨学生として受け入れ大学入学から卒業までの5年間奨学金を支給している。また、この奨学金ですでに5名の卒業生が医師となり、医療活動に従事している。

医学生の奨学金は1年間500ドル～600ドルである。しかし、学生達は1年間の授業料と衣食住の必要金額は計約\$1,000で生活できる。よって日本と比較ならないほど価値のある奨学金であるため毎年奨学生候補への申し込みも多いが、奨学金資金の関係上当クラブは毎年苦渋の選考をしている。

10年前に当クラブ独自に創設した「奨学会」の奨学生は、ザガイン管区シュエボ出身のマグエ医科大学の医学生達であるため、今まで当クラブ派遣会員はシュエボまで出向き奉仕活動を行ってきた。しかし今回その奨学生13名(本年新奨学生4名を含む)と現在医師になった5名の卒業生をヤンゴンに招待し、当クラブ会員が学生達に今年1年分の奨学金を手渡しで支給した。

その支給式は、ヤンゴンにあるレストランを貸切、現地協力者と共に総勢36名で夕食会を兼ね行った。日本では一般的な中華料理であるが学生達は初めての御馳走で楽しそうに食べていた。食事後、ビンゴゲームを行い会員が日本から持ち寄った



卒業生(医師)と現役医学生



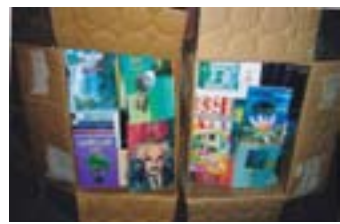
図書購入費を協力者：ウテンモーウー氏へ



本年の新奨学生：医学生



協力者：キンララモー氏



ヤンゴンで購入した図書の一部



賞品で大いに盛り上がった。奨学生たちはザガイン管区シュエボはヤンゴンより北部約700km、マンガレーから160km北西部にある田舎町。高速バスを乗り継ぎ約12時間を掛けてヤンゴンへやって来た。また、今回併せて、事前にクラブ会員から図書購入のための募金73,000円を集め、ヤンゴンで図書を購入、現地の物価や為替格差の違いで子供用図書約800冊も購入出来た。それらを当クラブが過去ミャンマー各地に建設した5館の「図書館KIBOH」に追加寄贈した。既に7年経過している図書館も有り蔵書も古くなったり不足していることから地元の要望もあり、また地方都市には子供用図書の新書があまりなく購入で

## 第13回WCS活動事業報告

- ◎事業内容 奨学金の支給, 文房具の寄贈
- ◎寄付金の使途 クラブ奨学会KIBOHの奨学金
- ◎訪問目的 当クラブで設立した奨学会KIBOHより奨学生16名(新奨学生3名含む)に奨学金(総額\$7,900)の支給と文房具\$1,000分を寄贈
- ◎実施時期 2011年2月11～15日
- ◎派遣会員 中根常彦(国際奉仕委員長・団長)  
稲垣裕幸(WCS委員長)  
田中暉登(元会長)  
太田政信(元会長)  
岡田吉生(直前会長)
- ◎同行者 京 幸一(奨学会カウンセラー)

岡崎城南ロータリークラブは、国際奉仕活動としてミャンマー教育支援プログラムの奉仕活を行っており本年で第12回目となるミャンマー訪問を行った。ミャンマーの古都バガンへに自費参加のクラブメンバー5名と本奨学会カウンセラーの元ミャンマー人京氏を含め計6名が訪問した。

当クラブは過去1998年からミャンマー各地に図書館、給水施設や道路整備など教育支援プログラムを行ってきたが、クラブ創立20周年を期に、クラブ有志で設立した「あおい奨学会」で実施していた奨学金制度をクラブの奉仕活動として拡充した拡充した。この制度はミャンマーの医学生を支援する目的で行っている。

ミャンマーには医科大学は4校しか無く、全国で2600名の優秀な学生しか入学できない。出身地域により入学できる医科大学が指定されている。そこで成績優秀でも貧しさから進学できない学生を支援するため当クラブは、10年前にクラブ有志で創設した「あおい奨学会」をクラブ設立20周年を期に拡充し、当クラブが「奨学会KIBOH」を設立した。毎年2-4名を奨学生として受け入れ大学入学から卒業までの5年間奨学金を支給している。

また、この奨学金ですでに5名の卒業生が医師となり、医療活動に従事している。

医学生の奨学金は1年間500ドル～600ドルである。しかし、学生達は1年間の授業料と衣食住の必要金額は計約\$1,000で生活できる。よって日本と比較ならないほど価値のある奨学金であるため毎年奨学生候補への申し込みも多いが、奨学金資金の関係上当クラブは毎年苦渋の選考をしている。

今回ミャンマーの古都バガンにその奨学生16名と現在医師になった5名の卒業生をヤンゴンに招待し、当クラブ会員が今年一年分の奨学金を手渡しで支給した。

又、今回併せて事前にクラブ会員から文房具購入のため募金85,476円を集め文房具購入費として現地ボランティアに手渡した。



卒業生(医師)と現役医学生



今年一年分の奨学金を支給：笑顔かこぼれる



初参加の稲垣氏

卒業生と共に：中根氏



## 第14回WCS活動事業報告

- ◎事業内容 奨学金の支給
- ◎寄付金の使途 クラブ奨学会KIBOH 及びあおい奨学会から奨学金の支給
- ◎訪問目的 当クラブの奨学会より奨学生15名(新奨学生2名含む)に奨学金(総額\$8,200)を手渡しで支給
- ◎実施時期 2012年2月9日～13日
- ◎派遣会員 松永茂夫(国際奉仕委員長)  
天野邦彦(WCS委員長)  
板倉正直  
近藤正俊(訪問団々長)  
太田政信  
田中暉登  
京 幸一

国際奉仕活動として本年度で第13回目の訪問となるミャンマー教育支援プログラムの奉仕活動を現地ミャンマーで参加会員7名が行った。医師となった8名を含め22名の卒業生・現役学生をミャンマーの旧首都ヤンゴンへ招待し、交歓会を開催し物心両面から支援をした。

このヤンゴンでは学生たちも年々、体型や顔かたちが大人になり成長していることを知ることが出来、又、学生たちの希望で地元の田舎にはない「カラオケ店」へも行き、日頃シャイな学生達が積極的に歌い、踊る姿を見て目を細め、笑い声に満ち、我が子の成長のように嬉しく楽しい一時が過ぎた。

また、新奨学生2名はまだ16才であり、日本人を見ることが初めてなので、彼らは我々の前では極度に緊張し、笑顔も見ることが出来ず、現役学生の助けを借りて笑顔で接しながら会話し、緊張をほぐした。

翌日には、また学生達の希望でヤンゴン市内になる遊園地へも同行した。そこにはジェットコースターや観覧車があり、初めての学生もいて、多くの乗り物でスリルを味わい、彼らは大いに盛り上がり日頃のストレスを発散したようだ。学生の中には高所恐怖症やスピード恐怖症の学生も数名いて、乗り物に乗れないと我々に言ってきたが、無理矢理乗せて体験をさせたことに些か反省をしている。学生たちに聞くと、ショッピングより観光地へ行くよりもこの遊園地が楽しいと口々に感想を述べていた。

だが、大学の研修医制度(5年生を終了すると1年間の研修医期間が有る)が、近々に改正されるとの情報を得た。つまり、研修医期間が1年半の変更されるとのことで、それに伴い卒業が延長され、その延長の期間の授業料や下宿代の負担が必要となり、学生たちにとっては経済的に支障となる事案になりそうだ。

そして第1回の卒業生で現在女医のミャータオンダオン(29才)から今年中に結婚をすとの報告を受けた。その相手は1才年下で同じ医師であるとのこと、彼の写真も見せてくれた。これは嬉しい報告であった。祝福してやろう!!



卒業生(医師)へもお土産：天野氏



笑顔がこぼれる一年ぶりの再会



我々と卒業生・現役学生だけでこのメンバーになった

## 第15回WCS活動事業報告

- ◎事業内容 奨学金の支給とKIBOHクリニック視察
- ◎寄付金の使途 クラブ奨学会KIBOH 及びあおい奨学会から奨学金の支給
- ◎訪問目的 当クラブの奨学会より奨学生15名(新奨学生2名含む)に奨学金(総額\$8,800)を手渡しで支給
- ◎実施時期 2013年1月25日～30日
- ◎派遣会員 近藤正俊(国際奉仕委員長・団長)  
小林通利(WCS委員長)  
中根常彦(会長エレクト)  
太田政信  
田中暉登  
市川聡明  
京 幸一  
鈴木 豊  
永谷和之  
佐久間麻耶(市川会員の長女)

当クラブ独自事業の国際奉仕活動として本年で第14回目の訪問となるミャンマー教育支援プログラムの奉仕活動を現地ミャンマーで参加会員10名が行った。本年は当クラブの奉仕活動の拠点であり、過去に図書館3館を建てて寄付したザガイン管区シュエボを訪れた。この地は、ヤンゴンから空路で北へ約700km時間半かかりマンダレーへ、そこから陸路で北西部へ160km行ったところにあるため日本からは丸一日間以上かかる。



マンダレー空港にて奨学生達と1年ぶりの再会

マンダレー空港では医師となった9名を含め25名の卒業生・現役学生の出迎えを受け、空港からバスで3時間、車に揺られシュエボに着く、この道路は、一車線のみの簡易舗装された悪路であったが、昨年少し改良され二車線の有料道路となっていた。そしてシュエボ第1高校にある築12年となった第1図書館KIBOHを始め、他の第2、第3図書館も視察した。今でも図書館として十分利用されている状況を確認できた。ただ長い雨期もある地域なので何れの図書館の外装の痛みは酷く一部塗装が剥げ落ち、外装のリフォームの必要性を感じた。学校から予算もなく塗装修理をしたいと現地管理者側から要望も受けた。



築12年経過の第1図書館KIBOH

また、今年当クラブメンバーから寄付を募り、その費用で卒業した医学生のために共同

診療所を建設した。その名は「KIBOHクリニック」。その建物建設工事が本年1月上旬に完了したこともあり、その工事完了も確認する目的もあった。

この視察時「KIBOHクリニック」に多数の高齢者で溢れていた。開業前なのにこんなに混雑していることが不思議であったので地元協力者にその理由を聞くと、地元の医師がこの建物を使い、無料で高齢者の健康診断をしているとの回答であった。新築の診療所内ではすでに我々の奨学卒業生である医師数名がボランティアで診察をしていた。我々が支援してきた

KIBOHクリニックの玄関  
医師達の姿をみて、頬が緩む。我々はとても心が温かくなった  
そんな地元の人でござった返す建物前でクリニック開所式を目立たぬよう執り行った。診療所



内には、診療のための器具、機材が少なく、まだまだ我々の支援が必要であることを痛感した。ミャンマーにはまだ健康保険制度もなく医療技術も低く、高度な検査機



クリニック内無料診察中の若き医師達

械・器具がある病院も少ない。大都市に1～2あるのみ。国民の所得が低いため治療費が払えない人が多いので高度な医療設備が不要なのだろうか？

また大都市を除く地方では医師達は所得も低く、生活も楽ではないという。加えて医科大卒業後の医師達には政府公務員として僻地医療の従事義務があるのだが、この数年、その派遣先の定員が少なく、政府の予算不足もあり医科大学卒業後医師資格を取得しても、政府公務員として就職するには4～5年間自宅待機しざるをえない状況が続いている。そのために昨年、我々は卒業した医師達へ共同して働くことが出来、地元へも奉仕が出来る診療所をこのシュエボに建てることにした

つまり我々が奨学生として支援して医師になった彼らが、自宅待機期間にこの診療所で僅かでも生活費を作り、医療知識の向上を計り、地元の貧しい人たちを救うことが出来れば、



「KIBOHクリニック前で開所のオープニングセレモニー」



クラブ有志からクリニックへノートパソコンとプリンターをプレゼント

我々が6年間支援したことが無駄にならないからだ。現状を見て今後も彼らの支援を望む。

その後、往路と同じ少し良くなった道路をひた走りマングレーへの車中で、当クラブの新奨学生の受け入れは予定通り本年度で終了することを医学生達へ説明した。実は当クラブ

の奨学制度は5年計画で進めてきて本年が最終年度に当たるため新奨学生の受け入れは次年度から停止することになっている。しかし、既存学生のための奨学金は卒業まで支給を確約している。

その新奨学生受け入れ停止の方針に彼らは新奨学生の継続を強く口々に要請してきた。最年長の卒業生の女性医師は「私は貧しくて医科大進学を諦めていたが、この奨学金で大学を卒業でき医師にも成れた。素晴らしい制度だ。」また同じく男性医師は「人生を大きく変えることの出来るこの制度を続けて欲しい」、若き医師となった新卒業生は「ミャンマー国内には奨学金制度は、全くありません。アルバイトも雇用がないから学費を作れない。是非、継続を！」と全ての卒業生と現役学生たちが我々に訴えてきた。

そんな中、僅かな所得しかない卒業生からは、資金提供の申し出まであった。医師として働いた給料から毎月少額であるが積み立てた預金をこの奨学金制度に活用して欲しいとの要望で、我々メンバーはその篤き申し出に驚き、感動した

彼ら医師の給料は公務員であるため給料は月一万五千円程度だから提供された資金を奨学金資金にするにはほど遠い金額であるが、奨学金が重要且つ貴重な学資と十分

分体感しているのだろう。我々の支援目的を彼らが自分たちの力で実践する日が近いことに感激した。



卒業生の医師から要請が！

悪路に揺られながら、そんなやり取りをしマングレーに着く、王宮近くのレストランで新奨学生2名の認証式と15名の学生たちへ奨学金の

支給式を楽しく行う。学生たちは毎年この式典を心待ちしている。彼らは奨学金はもちろんであるが、他に各スポンサーからの贈物を期待しているからだ。事前に学生たちは、eメールなどで希望のものをこちら側へ要請してくるが、この日まで何になるかこちら側からは知らせていない。学生個々の顔を間近に見て、各学生へ今年一年分の奨学金を支給、併せて各スポンサーからの贈物を渡した。

併せて、我が心優きスポンサー達は、この訪問メンバーへ託し卒業生達へもプレゼントを手渡した。

これらプレゼントは大学の授業で使う聴診器や血圧計などが主である。現地では聴診器も購入可能であるが、現地のものは品質が悪く、聴診器は雑音が多く肺や心臓の音が聞きづらいため日本製の高品質なものを要望してくる。また、血圧計は、まだデジタル式が普及していなく水銀式を求めてくる。現地の水銀式血圧計は水銀が漏れるような粗悪なものが多く、安全で高品質な日本製を要望してくる。

我々は日本人は毎年、日本製の技術力や品質の高い評価をミャンマーで再認識でき、貴重なチャンスでもある。

ところで、本年、特に変わった要望は、授業の際、先生の講義を録音できる長時間対応の録音機で動画や画像も閲覧でき音楽も聴くことの出来る「mp4プレーヤー」の希望が届いた。ミャンマーでもインターネットが一部で普及し、学生達は新しいそのIT機器を知っていた。しかし我々中高年のメンバーはこのmp4プレーヤーをそれを知らず、且つ、日本語表示でなく英語表示のものを購入するのに些か苦勞した。

さて奨学金支給式後、何時もの交歓のための夕食会とゲーム大会を開催。毎年奨学生たちをこの支給式などに招待している。。総勢25名の現役学生や卒業生などでその招待費用は、多人数のため多額な費用が必要だ。そのためこの費用はクラブメンバーの篤志で賄っている。メンバーの支援でこのミャンマー支援が出来ていることに感謝し、この紙面で厚く御礼申し上げたい。

学生たちと交流のためのゲームは毎年ビンゴゲームで、ミャンマーではこのゲームは殆ど知られて無いが、とても好評だ。賞品は訪問メンバーの寄付で机やタンスの片隅にある不要品など物余りの日本ではあまり使われないもの、例えば、貰い物の折りたたみ傘やノート、ボールペン、カレンダー、手帳など日本製なら非常に喜んでくれる。そんな交流を通し、同行メンバー達は言葉の壁を越えて、笑顔で物心両面から奨学生達を支援をしている。

そして、卒業生や現役学生の素晴らしい笑顔と澄んだ瞳と歓喜の声で、我々の旅の疲れは、どこかへ飛んで行った。

最後にこのミャンマー支援プログラムが形態を変え、新しい組織とシステムで再稼働する動きが出てきていると噂で聞いた。15年も続いた奉仕活動だ。形はどうであれ、是非、ミャンマーと日本の架け橋を継続し国際平和に寄与して欲しいと切に願う。

—— 訪問団長 近藤正俊



診療所の全景 玄関には[KIBOHクリニック]と掲示



棚には医薬品と医療器具



高齢者で混雑する診療所内 ボランティアの看護師もいる。



# KIBOHクリニック 竣工

2013/1/26



建物外観



玄関付近



オープンセレモニー・テープカット



現地協力者へノートパソコン・プリンターの寄贈



診療中のKIBOHドクター(1)



診療中のKIBOHドクター(2)



# ミャンマー支援 Q&A (1)

当クラブは本事業を毎年継続し、その都度、訪問メンバーから当クラブメンバーに帰国報告や現地状況を伝えています。その際メンバーから良く聞かれる事柄をQ&A形式でまとめてみました。

**Q:なぜ、何時もわざわざミャンマーに行くのか？**

A:毎回一人20万円もの旅費を掛けてわざわざ現地へ出向くのか？ 図書館建設資金を振込等で海外送金すれば、用が足りるのでは？ との声もありますが、それには理由があります。ミャンマーは二重為替レート(チャット)の国です。

公式レートは、\$1= 6.3kyat(チャット:現地通貨単位)、しかし市場レートは、\$1=1,200kyat(2005/10月時点)です

これは、日本よりミャンマーの政府系銀行に\$4,000振り込みをした場合、公式レートの適用となり、現地で受け取る金額は、

$$\$4,000 \times 6.3 = 25,200 \text{kyat}$$

にしかなりません。しかし直接我々が現地にドルを持参して両替すれば、市場レートになり(2005/10市場レート)

$$\$4,000 \times 1,200 = 4,800,000 \text{kyat}$$

にもなります。その差なんと190倍になります。ですから当然、市場レートで両替するためには、直接現地にドル現金を持ち込みする必要があります。

(注※なお、ミャンマー人が公式レートでチャットからドルへの両替は、6.3チャット=1ドルになるのですが、上限は約100ドルまでで、それも限られた一部の国民のみだそうです。)



500チャット紙幣、日本円で50円くらい。国外には持ち出せない紙幣だ

また、ミャンマーの一般国民はドルキャッシュを持つことは法律で禁じられていますので我々がチャットに両替して渡さないこの活動で現地協力者が罰せられることになります。

**Q:なぜ、毎回図書館建設を現地確認に行くのか？**

A:仮に市場レートで送金できるとしても、資金のみ送ればそれで良いのでしょうか？ 現地ではこの図書館建設のために無報酬で多大な尽力をしてくれる協力者がいます。その方々に直接、感謝の言葉を伝え、この寄付を受けた地元の高校にも図書館について今後の維持管理をお願いする必要があります。つまり、奉仕活動はお互いに顔が見える奉仕が基本ではないかと思いま



ミャンマーは、多民族国家のため、信頼関係の構築は時間がかかる。時折、ミャンマーの方より日本人は信用しすぎと忠告を受けるが・・・

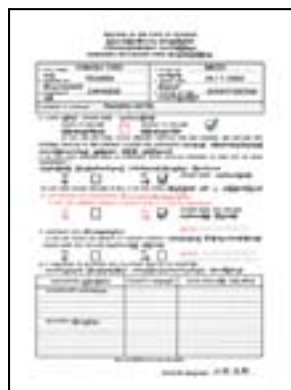
す。

ただ、当初はクラブからの貴重な資金を無駄にしたくない気持ちと、本当に図書館を建設してくれるのだろうかとの不安もあり、そのチェックのため再訪問していたことも事実です。

尚、この渡航費用は、すべて訪問メンバーの自費であることも付け加えておきます。

**Q:なぜ、複数メンバーで行くか？**

A:これもミャンマーの為替に関する規定があり、ミャンマー国外から国内への持ち込みは現金1名\$2,000の制限があります。よって、我々の旅費も各自\$1,000位持ち込みますので、例えば\$4000の図書館建設資金をミャンマー国内に持ち込むためには最低4名のメンバーが必要になります。また、現金\$2000以上国内に持ち込むためには、入国時に申請をして制限の解除の許可を受け、ミャンマー出国時に支払った全ての領収書を出入国管理官に提出する必要があります。尚かつ支払先にもそのための政府の許可が必要とのこと。我々民間レベルの活動には、その許可を受けることは非常に困難と思われます。よってこの制限をクリアするための対応策です。



(入国時の税関申告書)

下段に2000ドル以上の持ち込みがあるかの質問がある。時折、入管で検査があり持ち物全てをチェックされる。

最近はなくなりましたが、以前時計、カメラなど全てを申告し、帰国時にチェックがあったこともありました。

**Q:今の状況は？**

A:ご存じのようにミャンマーは軍事政権で、法律は突然変わる事がしばしばあります。ミャンマーでは、州または管区(県に相当する行政区)により法律も異なり、最近ザガイン管区では、我々の奉仕活動についての寄付金を行政(政権)が経由に管理するような規制が出来て、この事業継続が困難になりました。

現地協力者も我々の寄付資金が、満額現地に交付される事に疑問を持っていて、事業継続は無理であることを伝えてきています。又、他管区及び州でもこのように規制される方向だそうです。

**Q:ミャンマーの治安は、安全？**

A:現在の軍事政権のお怪我かもしれませんが、治安は良く安全な国と感じます。ただ置き引きやスリなどの犯罪は多くあるようですが殺人事件など重大事件は少ない国とのことで、8回の訪問でも治安に関しては問題はありませんでした。タダ、インフレが、激しく庶民の暮らしは苦しくなっているため犯罪は増加傾向にあるようです。

# ミャンマー支援 Q&A (2)

Q: 今までに支援した事業と総額はどのくらいになりますか？

A. 下記の表が、本クラブ等から支出した年度別費用です。

2013年2月：現在

回	年度	事業内容	対象地	事業金額	他の寄付種類	寄付金額
1	1999	教育環境整備(道路建設費)	ヤンゴン	\$2,500		\$0
2	2000	教育環境整備(講堂改修費)	ヤンゴン	\$2,500	奨学基金(個人寄付)	\$600
3	2001	第1図書館建設(半額)	シュエボ	\$2,000	図書購入費(個人寄付)	\$1,000
4	2002	第1図書館建設(半額)	シュエボ	\$2,000	図書購入費	\$1,000
5	2003	第2図書館建設	シュエボ	\$4,000	孤児施設へ	\$700
6	2004	第3図書館建設	ノースダゴン	\$4,000	図書購入費(個人寄付)	\$1,000
7	2005	第4図書館建設	シュエボ	\$4,000	図書購入費	\$1,000
8	2006	第5図書館建設	マグエ	\$4,500	図書・文房具購入費	\$1,780
9	2007	井戸給水施設整備	マグエ	\$4,000	図書購入費	\$1,000
10	2008	教育環境整備(道路整備費)	シュエボ	\$4,500		\$0
11	2009	奨学金 2名	シュエボ	\$1,000	図書・文房具購入費	\$2,020
12	2010	奨学金 4名	シュエボ	\$2,000	図書購入費	\$780
13	2011	奨学金 6名	シュエボ	\$3,000		\$0
14	2012	奨学金 8名	シュエボ	\$4,200		\$0
15	2013	奨学金 10名	シュエボ	\$5,800	診療所建設資金 (会員有志から)	\$16,700
計				\$50,000		\$27,580

(注) 上記11,以降は、当クラブ特別会計「奨学会KIBOH」から医学生に支給した奨学金額

## KIBOH clinicについて

ミャンマーの医科大学は卒業後公務員となり3年間僻地医療従事者が入学の条件となっている。

しかし2010年以降、医療機関が増えず、公務員医師の定員も増えなく、民間病院も少ないため医師資格を取得し卒業しても就職口が無い状況が続いていた。

2012年には、政府から未就職の医科大卒業生に対し4-5年間の自宅待機の指示が出され、国内に約2400人の自宅待機組が生まれた。

彼らも生活があり、また医療の道を継続するため、個々に小さな診療所を地元で開設している。



そこで「あおい奨学会」メンバーで卒業生達がこの自宅待機期間中に共同で働き医療に従事でき、若干の所

得を得られるよう共同診療所を建設した。奨学会の名に合わせKIBOHクリニックと名付けた。



Q: 奨学会KIBOHは、2009年にクラブの奨学金制度となりましたがその前身の「あおい奨学会」は、今までどの程度の奨学金を支給していますか？

A: 下記が2012年度までに「あおい奨学会」から支給した年度別奨学金支給総額です。  
また、同奨学会は現役学生に対し卒業するまでの期間は奨学金を支給する約束をしています。

<あおい奨学会年度別支給金額>

年度	奨学生数	支給奨学金	備考
2000	1	\$220	医学生1年間\$200の支給。当時はこの金額で生活できた
2001	3	\$660	
2002	5	\$1,750	インフレのため年\$300に増額、
2003	6	\$2,000	
2004	6	\$1,800	4～5年生\$400に増額支給とした
2005	7	\$2,300	
2006	9	\$3,000	研修医期間1年\$200を支給開始
2007	9	\$2,700	
2008	9	\$4,500	1～3年生\$500、4～5年生\$600、研修医\$300に増額支給とした
2009	9	\$4,900	
2010	10	\$4,900	
2011	7	\$3,400	
2012	5	\$3,000	就学期間延長（1年半）のため5年生のみ\$800とした
2013（予定）	（4）	（\$1,900）	
2014（予定）	（1）	（\$300）	
計 （予定を除く）		\$35,180	

（注）この奨学金の原資はすべて会員有志個人の寄付。

（注）奨学金は当初200ドルでスタートした。この金額で授業料、食事など最低限学生生活を送ることが出来た金額であったが、以後、ミャンマー国内のインフレにより生活費等が増大し、授業料も値上がりしたためその時代に合わせて増額をしていった。

● あおい奨学会メンバー数の推移

2000	'01	'02	'03	'04	'05	'06	'07	'08	'09	'10	'11	'12	'13
4	4	7	9	9	11	16	19	22	23	23	23	23	23

# ミャンマー支援 Q&A (3)

Q: ミャンマーの大学入試はどの様になって  
いますか？

A. 現地発のブログより関連記事があったのでご参考に・・・。

2010年2月18日発行のBI WEEKLY ELEVEN  
NEWSより

ミャンマー人の人生を決めるとしてよい全国統一大学入学  
資格試験が3月に行なわれるが、昨年度の人気大学のラン  
キングが出ていた。

また、全体的に男子より女子の合格ラインが高くなっていて、  
女子は高得点を取らないと希望の大学に行けない。この試験  
は6科目で、文系と理系では科目が異なっている。最低点は  
240点だが、1科目でも40点を満たないと240点以上でも不  
合格となる。

合格ラインのトップは医科大学(女子)の490点で、医科大学  
に入学する女子はミャンマーではトップ、本当の才媛なので  
ある。やはり女子の方が真面目に勉強しているようだ。

商船大学のランクが高いのも興味深い。これは在学中に給  
料も出るし卒業後、船員になることができるので就職しやすい大  
学に人気が集まる傾向がある。

参考: 2008年度、ミャンマー人気大学の合格ライン(600点  
満点)

医科大学 458(男) 490(女)  
歯科大学 447(男) 485(女)  
薬科大学 467  
医療技術大学 453  
看護大学 424(男) 453(女)  
基礎健康大学 426(男) 450(女)  
漢方薬科大学 422  
商船大学 481(男) 485(女)  
航空大学 430  
コンピューター大学 365  
経済大学 300  
工業技術大学 320(男) 330(女)  
教育大学 398(男) 443(女)  
外国語大学(英語) 486  
外国語大学(日本語) 472  
外国語大学(中国語) 470  
外国語大学(仏語) 455  
外国語大学(韓国語) 453  
外国語大学(独語) 444  
外国語大学(露語) 437

以上、もちろん全て国立大だ。ミャンマーには私立大学はない。

また、ミャンマーの医科大学は、ヤンゴンに二校、マンダレーに一  
校、そしてマグエに一校とミャンマー国内に四校しかない。

そのため4大学で全国の一学年約2,600名の定員だから入  
学の門戸は非常に狭い。そして出身高校により進学する医科  
大学は定められている。よって医科大へ進学できる学生は、統  
一試験で地域のトップクラスばかりが集まることとなる。

つまり、全国統一大学入学資格試験の成績順で進学できる  
大学が決まり、成績上位から医科大、歯科大、・・・の順となる  
。よって、日本で言う大学入試はない。

医科大では、毎年進級試験があり、2年留年すると退学処分  
となる。修学期間は6年間、授業も長時間で半年毎に試験も  
あり、単位取得のためアルバイトなどする時間は全くない。また、  
医科大の授業料も最近値上がりしたようで年\$1000程度と聞  
いている。そして5年生を終了しその後研修医として各病院に  
配属され、そこで1年間勤め晴れて卒業、医師免許を取得でき  
るが、卒業後僻地医療へ最低3年間の従事が義務となっており、  
その義務を果たさないと開業など出来ないようだ。

また日本で言う眼科、内科などの専門医になるためには、上記  
の僻地医療従事義務を勤め上げ、且つ再度大学に戻り修  
士課程3年を修学しなければならない。よって、開業医になるた  
めには大学卒業後早くても7年以上もかかり独立開業はなかなか  
難しい。

この医療従事義務派遣に対し、特に政府当局からこの僻地  
医療病院への指定が遅く4-5年間もの長い間、自宅待機期  
間があるようで向学心に燃えた医者の方にとっては無駄な時  
間を過ごさざるをえないようだ。

よって、最近では医科大学を卒業しても医師として開業の道が遠  
く難しいので、優秀な若者は結局、医師にならず、海外でビジネ  
スや他の職業に就くなど頭脳の流出が多いと聞く。こんなところで  
政治は若者と深く結びついていることを知った。



臨床研修中の医学生達



第1図書館 2002年



第2図書館 2003年



第3図書館 2004年



第4図書館 2005年



第5図書館 2006年



2007年 KIBOHの泉(井戸)



「ありがとう」と言っていた  
この子たちの嬉しい笑顔を  
いつまでも  
忘れないようにしたい。

# 感謝とお礼



2001年3月

Dr. キョー キョー モー (元米山奨学生)  
カイン カイン シュエ(奥様)

私は、日本に滞在しているミャンマー出身のカインカインシュエと申します。日本に来て11年になりました。主人のキョーキョーモーさんは、ロータリークラブの米山奨学金のお陰で名古屋大学の博士号を収得し、現在日本の住友ベークライト(株)に研究員として働いています。米山奨学金を貰った時、お世話になった岡崎城南ロータリークラブを主人とともに感謝しています。今年2月にお世話になった岡崎城南ロータリーは、私が卒業したミャンマーのシュエポー高等学校(第1)に寄付しました。心から感謝しています。今年でミャンマーへのWCSは3回目です。

シュエポーはミャンマーの第二の町マンガレーから150キロ位離れている小さな町です。ミャンマーの第三王国を確立した王様、アラウンフヤーは、シュエポー生まれです。シュエポーの町には、このアラウンフヤー王様の美術館は有名です。

現在、シュエポーの人口は8万人位です。殆どの人は、農業や商売人が多いです。一般の市民の生活に、余裕はなく、一ヶ月の平均収入は3千円位です。ですから市民の人達は、自分の収入で自分達の生活のために精一杯です。つまり学校に寄付することは、無理な状況です。

今年2月、シュエポー高等学校が、岡崎城南ロータリーWCSの寄付金で図書館を建立することになりました。私は小学校から高校卒業までシュエポー第1に通っていましたが、図書館は、ありませんでした。シュエポー町にある学校の中で図書館が出来たのは、これが初めてです。地元の皆さんは大変喜んでます。私も学校へ通っていた時から、学校に図書館が、欲しいなとずっと思っていました。今回、夢が叶いました。岡崎城南ロータリークラブの皆さんに心から感謝しています。学校の先生たちや学生達や親たちを含め、皆さんも大喜んでいます。

また、今年城南RCのWCS活動は、寄付金だけでなく古着も寄付しました。有り難う御座います。私はシュエポーに住んでいた時、印象に残ったのは近所に住んでいる貧しい家族の子供のことです。暑い時でも、寒い時でも裸で、私が何で服着ないのと聞いたら、着る服が無いからこのままですと答えました。

それで、今年2月に学校への寄付金と同時に古着も寄付したい気持ちもあったので岡崎城南ロータリーの一部の会員に頼みました。ミャンマーでも貧しい人達を、支援する団体が現地にあります。資金がなくてなかなか効率良くできなかったです。今回の古着は、この団体を通して子供達に配りました。

最後に、私から岡崎城南ロータリークラブの会員達にお願いがあります。13年前最貧国になったミャンマーのために学校の寄付金を始め、古着、文房具、本、家庭用品などを捨てずに集めて欲しいです。

これからミャンマーの方に、色々な物を寄付しながら日本とミャンマーの交流も広げたいと思っています。宜しくお願いします。

(記：カインカインシュエ)

皆さんお久しぶりです、私は元米山奨学生のミャンマーから参りましたキョーキョーモー(Kyaw Kyaw Moe)と申します。現在、住友ベークライト(株)に研究者として在籍しております。学生の時のことを思い出すと、岡崎城南ロータリークラブに感謝の気持ちが一杯です。もし、私はロータリー米山奨学会から奨学金からもらわなかったら博士号を取ることも出来なかったです。今はロータリー米山奨学会のお陰様で私の夢もかないました。

私は奨学金もらった時、何故留学生たちにただでお金あげてるかなとおもったんですが、今、就職してから冷静で考えて見ますと、皆様の生活が楽になる為、大事なことは教育、または技術であることが分かりました。それで、途上国からの留学生たちに奨学金を与えることは立派なことであることが分かりました。人々は地球に住んで、この地球にある資源を優れてる技術で有効に使えばもっと豊か生活になると思います。しかし、現状では先進国と途上国の間では差が激しく、途上国では技術の面で遅れてる部分もあり、この国の人たちにもっと教育に力を入れる必要があると思います。

母国、ミャンマーは日本と比べると経済的、技術的、教育レベルも遅れているのは間違いありませんが、これから遅れている母国の教育に力を入れなければならない。母国では、まだ学校へ行きたいけど行けない子供達が沢山います。岡崎城南ロータリークラブから毎年ミャンマーの学校に寄付金を与えることになって感謝の気持ちが一杯です。今年、岡崎城南ロータリークラブの一部有志のメンバー達が創立したAMFS (AOI MYANMAR FOUNDATION SCHOLARSHIP) はミャンマーの学生達にとって、国にとって幸いなことです。心から感謝しています。私もいつかは一人のメンバーになり、国の教育に力を入れたいと思っています。

ロータリー米山奨学会から奨学金をもらった時から私の新しい夢“ミャンマーでロータリー奨学会を創立”ことをいつか実現出来るように頑張りますので岡崎城南ロータリーの皆様、ご協力お願いします。(記：キョーキョーモー)

## <略歴>

京 幸一氏(キョーキョーモー) 1963年5月生まれ

- ・ヤンゴン大学修士課程修了
- ・名古屋大学大学院博士課程終了
- ・1998年工学博士号取得
- ・2008年日本国籍に帰化

京 ゆり夫人(カインカインシュエ)

- ・ヤンゴン大学経済学部卒業
- ・ヤンゴン税務署、日系企業勤務経験有り

# ミャンマー教育事情

ミャンマーという国の地理的特徴は、世界で最も人口の多い中国とインドに国境を接しているということ、つまり両国から歴史的にも文化的にも多大の影響を受けているということです。三次にわたるイギリスとの戦争で1886年には英領インドの一州となり、1935年に分離されるまでインドに属していました。これはイギリスから分離独立したパキスタンと比較してみると実に興味深く、ミャンマーの宗教は国教としての仏教、パキスタンの国教はイスラム教であり、これらの国の人々の生き方に大きな影響を与えています。体制はいずれも軍事政権。これらの国々はイギリスの植民地政策が最も過酷に実行された国でもあり、その影響は今日もなおあらゆる分野に大きな影を落としています。それは特に基礎教育体制がしっかりと確立していないこと、つまり義務教育体制が確立していないことが最大の深刻な課題であります。しかし、ミャンマーでは伝統的に僧院での寺子屋式教育が普及し、また歴代政府がミャンマー語の普及に務めてきたため、識字率は約83%と開発途上国の中では高い水準です。

ミャンマーの学校はすべてが公立校で、1年間の幼稚園課程を含む小学校が5年間、中学校が4年間、高校が2年間、大学が4年から6年間となっており、義務教育制度はありません。小学校から毎年進級試験が行われるため、かなりの生徒が留年したり、退学することになります。

授業は月曜～金曜日の午前8時40分から午後3時20分までで、1日に8つの授業があります。学年によって3～6教科を履修しますが、すべて必修で選択科目はなく、また、体育、音楽、家庭科、技術は履修科目に含まれていません。

校則により、制服は上が白のシャツで下が緑のロンジー(ミャンマー特有の腰巻きスカート)。髪形は短髪のみで、アクセサリーを身につけることは認められていません。なお、4月～5月の2カ月間が長期休暇で、10月と12月に10日ずつの休みがあります。

ミャンマーでは、前述のごとく義務教育でないため、都市部と異なり、農村に行き経済事情で学校に行けない子どももまだ多い。また、学校も少ないために小・中・高が同じ教室を使用していることも多く、午前は高校生で、午後は小・中学生のような、二部制をとっていることも多い。そのため、一概にはいえないが、観光



平日バゴダ(寺院)で絵はがきを売る少女達。学校には行きたいと言っていた。(2001年撮影)



図書館建設資金寄贈式の時、外には学校に行けない子供達が集まっていた。(シュエボ第2中学校・2002年撮影)

地でPOST CARDなどを売っている子供達の中には、学校に行っていない子も少なくないようです。

また、所得面から見ると、ミャンマーは世界最貧国の一つになっているように貧富の差が激しく、国内に大きな産業もないため就労先も極端になく、多くの国民の

所得は低く、この国はごく一部の富裕層と大多数を占める低所得者層で成り立っていて、中間所得者層はないと言われています。

よって経済的理由などで、進学率は中・高と上がるにつれ低下している。逆に都市部では教育熱が高まるなか、小・中・高の学区制が崩れ、登下校時の学校付近は



送迎の車(バス、トラックバス)などが道路をふさぎ、交通渋滞が社会問題となっています。そこで経済的理由で学校へ行けない子供達の初等教育は、僧院が学校代わりになっているのが現状で、大学については、全て国立校で入学試験はなく、高校時の成績により進学先が振り分けられ、上位は医科大学、次に工学系、その次は経済系と進学先が決まる。授業料は年間100ドル程度ですが、農村部では富裕層を除く平均所得



医科大学の女子大生:ミャンマー国内には医科大学は4校しかない。各校の入学生は、毎年250名程度とか。

は年間200ドル位ですから、国立大といえども大学進学には経済的な負担は大きく、進学をあきらめている多くの優秀な学生も多い。また医科大学以外、国内企業が少ないため卒業後の就職口は、厳しいようです。

さて、ご存知のとおり、ミャンマーと日本は、戦前・戦後を通じ政治・経済上はもとより、文化及び人的交流においても大変深い繋がりがありました。しかし、残念ながら現在は、政治的理由から一部の人道的援助以外の政治間援助は停止された状態にあり、大半の国民は劣悪な生活環境を余儀なくされております。このような中においても有為の若者達は向学の志を持ち続け、大学入学へのチャンスを待っております。ミャンマーが真に民主化の道を歩み始めるには、このような若者に多くの知識を得て貰うことが最も早く、且つ力強い発展に繋がるものと考えます。

# ミャンマーの仏教と僧院学校



ミャンマーのシンボル・シェッダゴンパゴダ

ミャンマーは、国民の90%近くが敬虔な仏教徒で、市民生活の中にも仏教が生きており、お寺や仏塔を建て来世への功德を積むという思想はいまでも強く残っていて、ミャンマー各地に仏塔がいたるところにみられます。また、ビルマ族の社会では、その大多数を占める仏教徒は男子は一生に一度は出家し、得度してお坊さんになり、修業しなければならないことになっています。これは短い間でもよく、一時的な出家なのですが、とてもマジメできびしいものです。日本でいう三日坊主とは全く違うマジメなものです。

仏教徒の殆どが週に一度は必ずパゴダ(仏塔)へお参りに行く。お参りに行く回数はその人間のバックグラウンドにより異なり、貧しい者ほどその回数は多い。日本でいう“困った時の神頼み”ではないがミャンマーという国においてお金持ちはお金持ち、貧乏人は何ら奇跡が起きない限り永遠に貧乏人なのである。故に現世で不幸せな分せめて来世ではという儚い願いがその行為に込められています。

ミャンマーの仏教は、小乗仏教(上座部仏教)であり、信仰は土着の聖霊ナツ神に現世利益を願う。来世の幸せを日本では大乘仏教の阿弥陀如来か観音にお願いするが、こちらでは釈迦にお願いしている。日本や中国に広まった大乘仏教が大衆救済を重視しているのに対し、上座部仏教は個人の修行を重視します。そのため、修行者である僧侶は人々の尊敬を集めているし、僧侶やパゴダに対する喜捨も在家の務めとして盛んであります。この壮麗な黄金のパゴダも、すべて在家の人々の布施によって建立され、維持されているという。決して経済的に豊かではないミャンマーの人々がなぜこれほどまでに喜捨をするのか、なかなか想像がつかません。しかし、ここで



托鉢の少年僧達

敬虔な祈りを捧げ、尊い存在に対して自分の財産を差し出す人々の姿は、理屈ではなくとも美しいと感じます。小乗仏教は「自己の救済」を意味するとされているが、少なくとも、先祖供養や葬式の時くらいにはしか登場しない形骸化した日本の仏教に比べれば、はるかに人々の生活の中に良い形で溶け込んでいるように思われます。



また、ミャンマーでは僧院とその地域住民とは密接に関係し、伝統的にノンフォーマル教育の場として僧院学校が初等教育においては重要な役割を果たしてきました。仏教の生活習慣に基づき、地域住民からの寄進やボランティアによって運営される僧院学校は裕福でない家庭や身寄りのない場合でも児童生徒を受け入れて指導を行っているため、特に地方では今日においても基礎教育の場として

重要な役割を担っているのです。ただ、学用品や教材、教科書など非常少なく、学校教育とは隔たりのあるようです。特にミャンマーでは学用品が圧倒的に不足しています。紙そのものの供給量が少ないため、ノートの代わりに石版使う学校もあります。教育現場の慢性的な物資不足を少しでも解消し、子どもたちの教育環境の整備が急務となっています。



寺院には少年僧が多い



尼僧の托鉢(少女も多い)



# 岡崎城南RC奨学金制度 奨学会KIBOHの創設

## 2008年10月. 当クラブ独自に奨学金制度を創り あおい奨学会と一体化し、医学生の支援拡大を計る。

我がクラブは1998年よりミャンマー教育支援プログラムを継続している。

そのプログラムは教育環境の整備として、ミャンマーに講堂の修復、図書館の建設、給水施設整備、道路整備など主に建設・建築においての支援をしている。またこの建設工事に伴い現地での雇用促進など多面的にも意義がある事業であったことは間違いない。

これらは歴代会長の理解と推進により継続されているため2760地区でも高い評価を受け、この活動が城南RCのワンクラブ・ワンカラーにもなっている。しかし、ミャンマーは高温多湿の国で雨期は5ヶ月間続き、建物は予想外に傷みは早く来る。よって、図書館数が増えると多額な補修費が必要になり、政府からの補助は当てにならないため、多分その要請が寄贈側の当方に来ると思われるが当クラブとしては負担できないであろう。

そこで、今の機にミャンマー教育支援プログラムを「箱物作り」から、「人作り」にシフトした方が事業の継続性から見て好機ではないだろうか。

そこで、当クラブ創立20周年記念を機に「奨学会KIBOH)」を創設し、現在のWCS活動費を奨学金として現地の経済的貧困から大学に進学できない貧しくても優秀な学生に医科大学進学から卒業までの資金援助をすることで「人作り」に寄与できる方向に転換することになった。

### (奨学会KIBOH制度の概略)

1. 本制度は、2009年より5年間とする。以後の継続は該当年度の理事会で協議
2. 奨学生は医科大進学の学生を対象とする。対象国は特定せず門戸を広げるが現地に協力者または世話人が居ることを条件とする。
3. 入学から卒業までの6年間支給、留年した場合は支給を停止する
4. 奨学金はドル建てで1年間1-3年生は\$500、4-6年生は\$600を現金で支給。
5. 奨学金の支給時期は、毎年1月または2月とし、支給方法は持参又は送金とする。
6. 毎年2名の奨学生を選考し、本制度2009/1/1より開始する
7. 奨学生の選考は、現地協力者経由で校長推薦のある学生より2名を選考する。
8. 奨学生には、半年に1回レポートを提出させる(支給条件)
9. 所管委員会はWCS委員会とし、当該年度の国際奉仕・WCS委員長が卒業まで各奨学生の担当となり学生のレポート受け取りなど行う。
10. 奨学生達より届いたレポートは、会報等に掲載する。

11. この奨学会のカウンセラーとして京幸一氏に依嘱。

尚、この制度運営は前述の「あおい奨学会」がすでに発足から9年経過し、現在学生13名の面倒を見ている実績もあるためこの「あおい奨学会」と一体化した奨学会として運営することになった。

但し、会計的にはそれぞれの資金で奨学金を支給しているため



2005年 パガンにて奨学生達と共に



2010年新奨学生



2009年奨学生と共に



2010年 卒業生と奨学生と共に：ヤンゴンにて

## 奨学会KIBOH 資金推移表 (10年間のシミュレーション)

### 収入

年度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	総額
収入(WCS資金)	¥500,000	¥500,000	¥500,000	¥500,000	¥500,000	¥430,000	¥0				
20周年記念資金	¥700,000										
収入合計	¥1,200,000	¥500,000	¥500,000	¥500,000	¥500,000	¥430,000	¥0	¥0	¥0	¥0	¥3,630,000

### 支出 ※1-3年生は年\$500支給、4-5年生年\$600、研修医1年間\$300の支給とする。 \$1=¥110

年度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	総額
奨学生1	¥55,000	¥55,000	¥55,000	¥66,000	¥66,000	¥33,000					¥330,000
奨学生2	¥55,000	¥55,000	¥55,000	¥66,000	¥66,000	¥33,000					¥330,000
奨学生3		¥55,000	¥55,000	¥55,000	¥66,000	¥66,000	¥33,000				¥330,000
奨学生4		¥55,000	¥55,000	¥55,000	¥66,000	¥66,000	¥33,000				¥330,000
奨学生5			¥55,000	¥55,000	¥55,000	¥66,000	¥66,000	¥33,000			¥330,000
奨学生6			¥55,000	¥55,000	¥55,000	¥66,000	¥66,000	¥33,000			¥330,000
奨学生7				¥55,000	¥55,000	¥55,000	¥66,000	¥66,000	¥33,000		¥330,000
奨学生8				¥55,000	¥55,000	¥55,000	¥66,000	¥66,000	¥33,000		¥330,000
奨学生9					¥55,000	¥55,000	¥55,000	¥66,000	¥66,000	¥33,000	¥330,000
奨学生10					¥55,000	¥55,000	¥55,000	¥66,000	¥66,000	¥33,000	¥330,000
運営費	¥20,000	¥20,000	¥20,000	¥20,000	¥20,000	¥20,000	¥20,000	¥20,000	¥20,000	¥20,000	¥200,000
支出合計	¥130,000	¥240,000	¥350,000	¥482,000	¥614,000	¥570,000	¥460,000	¥350,000	¥218,000	¥86,000	¥3,500,000
単年度収支差額	¥1,070,000	¥260,000	¥150,000	¥18,000	¥-114,000	¥-140,000	¥-460,000	¥-350,000	¥-218,000	¥-86,000	¥130,000
繰越額	¥940,000	¥1,200,000	¥1,350,000	¥1,368,000	¥1,254,000	¥1,114,000	¥654,000	¥304,000	¥86,000	¥0	

※1 奨学生は2012年まで毎年2名を認定する。以後、奨学生認定は停止し奨学金支給のみとする。

※2 毎年、WCS活動費50万円を奨学金に充てる。不足分は周年記念事業資金で補填する。

※3 運営費は、現地との電話代、郵送料等及び送金に必要な経費

# 岡崎城南RC奨学金制度 奨学会KIBOHの奨学生

2009年より当クラブ「奨学会KIBOH」が支援している10名の医学生達をご紹介します。  
 支援対象地区のミャンマー・ザガイン管区シュエボに五つの高校がありますが、その中から家庭的事情で我々の支援がないと医科大へ進学できない成績優秀で、且つ学校長の推薦を受けた多くの高校生より本会が選考した学生達です。2012年度まで毎年2名の医学生を受け入れ、計10名となる。

## 2009年

Khine Tahazin Win  
 カイ タジン ウィン  
 Institute of Medicine, Magway  
 マグエ医科大学 5年生  
 担当スポンサー：永田 裕氏



とてもおとなしく気持ちの優しい娘。

体は、まだまだ成長過程、年々大きくなりそう。もちろん肌色も白くなるでしょう。



## 2009年

Yadana Swe Swe Phyo  
 ヤダナ スイスイ ピョウ  
 Institute of Medicine, Magway  
 マグエ医科大学 5年生  
 担当スポンサー：田中暉登氏



遠慮がちな性格で素直な明るい子。

覚え易いお名前だが、ヤダナの意味はは宝石だとか。

## 2010年

Aye Min  
 エイ ミン  
 Institute of Medicine, Magway  
 マグエ医科大学 4年生  
 担当スポンサー：鈴木 豊氏



気の弱い感じがするが高校時代管区内で成績上位。

日本人と会うのも話すのも初めてだった。



## 2010年

Htet Arkhar Kyaw  
 テツアカー チョウ  
 Institute of Medicine, Magway  
 マグエ医科大学 4年生  
 担当スポンサー：市川聡明氏



イケメンで温和しそうだが芯はしっかりしている。

今時の若者で音楽が好きだよ。

## 2011年

Thet Hnin Ei  
 テツイ ニン イ  
 Institute of Medicine, Magway  
 マグエ医科大学 3年生  
 担当スポンサー：岡田吉生氏



童顔の残る少女のような学生。  
 成績優秀で当該年度申込学生の中で成績トップ



# 岡崎城南RC奨学金制度 奨学会KIBOHの奨学生

## 2011年

Zaw Thant Khaing  
ゾーテツイカイン  
Institute of Medicine, Magway  
マグエ医科大学 3年生  
担当スポンサー：永井量基氏



生まれて初めて日本人を見たそう。だから初対面では、かなりの緊張であったが直ぐに打ち解けたようだ。

## 2012年

Nyein Yu Wai  
ニヤイン ユウエイ  
Institute of Medicine, Magway  
マンガレー医科大学 2年生  
担当スポンサー：板倉正直氏



物静かでシャイな女の子。しかし、真は気丈そう。いずれ成長し立派な女医さんになることが期待できると感じた



## 2012年

Aung Pyae Moe  
アウンピュエモウ  
Institute of Medicine, Magway  
マンガレー医科大学 2年生  
担当スポンサー：松永茂夫氏



医師になることが将来の夢と語っていた。奨学金を受けることが出来てとても幸せだとも言っていた

## 2013年

Pyae Phyo Thant  
ピュエ ピュー ティン  
Institute of Medicine, Magway  
マンガレー医科大学 1年生  
担当スポンサー：永谷和之氏



驚いたことに日本語が話せる才女であった。日本語を数ヶ月間学んだと言っていたが、かなり堪能。可愛い17歳



## 2013年

Hlwan Htat Aung  
ルエン テツ アウン  
Institute of Medicine, Magway  
マンガレー医科大学 1年生  
担当スポンサー：小林通利氏



17歳でも大柄の髭ズラ。将来の夢を叶えるため医科大へ入学でき、幸せ一杯とか。日本人に初めて会い、緊張の連続だった。

※ 奨学会では各学生に対し担当のスポンサー（会員）を委嘱しています。学生から各スポンサーへは手紙、電子メールなどで近況や報告などが届きます。学生に対し心の支えになって頂き、且つ彼らと交流をお願いしています。

# 私設奨学金制度 あおい奨学会について

## (クラブ奨学金制度設立以前のもの)

ミャンマーは、アセアン諸国でもっとも貧しい国と言われ、一般国民は、極貧の生活が続いております。家庭の経済状況から進学や就学をあきらめる優秀な学生(高校までは授業料も安く、寺院などのボランティア教育もあるそうです。)も数多く、就職しざるおえないとのこと。

ミャンマーの進学制度は、日本と異なり、高校の成績が、優秀であれば大学進学は保証されている。成績順に医科大学、工学大学、経済大学、一般大学と振り分けられる、特に医科大学(ミャンマーでは4つしかない医科大学)は地域の学区制があり、その地域の高校成績上位者、一大学250名が、そのエリアの医科大(6.5年間)に進学できます。

しかし、成績が優秀でも経済的に困難な家庭の子女は、進学をすることをあきらめたり、折角入学しても退学者が数多く出ているようで、学校・父兄・同窓会も募金を集め就学の支援をしていますが、近年、ますます貧富の差が激しく、多くの学生が困窮している現状です。

そこで、ミャンマーの向学心に燃える優秀な大学生を入学から卒業までの期間、物心共に支援し、日本に対する理解と友好、世界平和を計る目的で、この私設奨学会「AMFSアムス」を創設いたしました。

### なぜミャンマーか?

ミャンマーは、日本との経済格差が大きく、円の価値が最大限に有効利用できる国と考え、「少ないお金で大きな効果」が期待できると思います。(他国であると我々の負担が多額になり、個人の立場では実践できないと思われます。)

# AMFS

さて、ミャンマーの学生は、1名当たり年間US\$300の学費があれば、安心して勉学に励むことができます。

数度のミャンマー訪問により、以上の実情などが解ってきたので、常連の訪問メンバー4名で下記のような私設奨学金制度を創設することとなりました。この制度は、基本方針として誰でも入会でき、あくまでもポケットマネーで奨学資金を提供することを原則といたしました。

### ○奨学金制度の概要

(会員)

本会会員は、下記の3種とします。

- ・会員 下記所定の年会費を納入するもの
- ・スポンサー会員 下記年会費と別に特別奨学金を納入

・賛助会員 本会の趣旨に賛同し、寄付金を納入するもの

(会費)

会員・スポンサー会員は、毎月5千円の会費を負担いただきます。この会費および寄付金は、本会運営費・下記1.の奨学資金に充当します。

(奨学金)

#### 1. 奨学資金

会員より奨学資金(元金取り崩し方式)として会費を徴収し、その資金から奨学生に奨学金を支給します。

つまり本会がスポンサーとなり、城南ロータリークラブWCS活動対象高校卒業の学生を、選考し奨学生(専攻は問わない)として入学より卒業まで年間US\$300奨学金をこの奨学資金より支給する。(資金額により奨学生の人数は別に定める)以下、この資金による受給学生を「あおい奨学生」と呼ぶ

#### 2. 特別奨学金

上記以外に、スポンサー会員は、会員1名が一人の学生を(一般大学4年間、医科大学6.5年間)支援します。(もちろん複数の学生も可)

単年度のみ奨学金では、学生は安心して勉学に励められませんので、卒業まで奨学金とし年US\$300を支援いただき、学生に支給します。ただし当初の1年目終了時に、その学生の就学状況等を把握し、正当な理由があれば中止することも出来ます。以下、受給学生を「特別奨学生」と呼ぶ。

(条件と審査)

#### 1. 対象

- ① 裕福な家庭の子息子女はこの制度の対象としない。
- ② 真面目に勉学を継続する学生であり、経済的に就学の継続が困難と思われる学生とする。
- ③ 簡単な日常英会話が出来、かつ日本に興味にあり将来自国の平和に貢献する学生とする。
- ④ 性別は問わない

#### 2. 条件

- ① 上記1.2の奨学生は、奨学金受給中に日本語の習得を条件とする。
- ② 奨学生は、奨学金受給期間中6ヶ月毎に本会、又は各スポンサー会員へ報告書を送ること。
- ③ 奨学生は、本会関係者が自国に訪問したときは面談し近況報告をしなければならない。

スポンサー及びその関係者がミャンマーに訪問した際には、その学生の就学状況、日本語学力を採点し、本会が、奨学支援の継続或いは中止を決定することが出来る。

また、スポンサー又はその関係者がミャンマー訪問時には、その奨学生を通訳兼ガイドとして採用し、国際理解のために交流を図ること。

### 3. 審査

あおい奨学生の場合、対象高校の推薦等により対象となる学生の紹介を受け、その中から本会が、面接・書類審査等により選考し、決定する。特別奨学生の場合は、本会が募集し、その中より各スポンサー会員が面接・書類審査等により選考し、決定する。この審査を本会がスポンサーに替わり行った場合、スポンサーは、それを容認する。

また、本会の奨学生として選考された場合、その学生に記念品を贈る。

## ○本会の状況

2001年にこの制度を4名で発足し、下記の学生に奨学金を支給している。

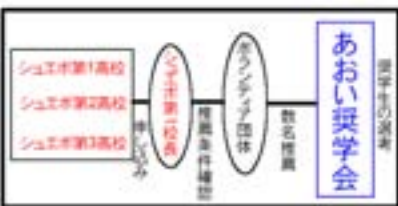
- 2001年 マンダレー医科大学 1名(07年卒業)
- シュエボ大学工学部 1名(05年卒業)
- 2003年 モンユワ大学経済学部 1名(修士卒業)
- 2004年 マグエ医科大学 2名(08年卒業)
- 2005年 マンダレー歯科大学 1名
- 2006年 マグエ医科大学 2名

本会のメンバーは2012年2月現在23名で、メンバーの会費とメンバー外の寄付金もあり、それらで資金運営をしている。

上記の中で2003年モンユワ大学入学の学生に対し、特別な方が支援している。本会の主旨にご賛同いただいたRC会員外の山口女史である。この心優しき山口女史は、例会場ホテル内で我々の奨学会創設の打ち合わせをしているとき、また運営について議論しているときにちょうど居合わせていて是非参画したい旨の申し出があり、1名の経済的に困窮している学生をお世話願うことになった。

全て学生は、城南RCのWCS活動の対象地であるシュエボの学校長と地域ボランティア団体から推薦に基づき、成績表・推薦書などを参考に毎年1-2名を奨学生として選考している。時には単年度で甲乙付け難く、優秀な学生2-3名決定したいが奨学資金の関係上、涙を飲んで1名に限定したこともあった。

卒業までの総支給奨学金は、医科大6.5年の場合は\$2,300(約276,000円)必要で、一般大学4年は\$1,200(144,000円)である。この金額で入学から卒業までの授業料、教科書代、食費、下宿代を賄うことが可能だ。もちろん優雅な学生生活を送ることは出来ないが、金銭的な不安や心配もなく専門教育を受ける機会を得たことに学生達は、喜んで



いてくれる。この金額は、日本の学生であれば1ヶ月分の生活費であろう。

今まで、本会のメンバーが岡崎城南ロータリークラブのWCS活動で毎年ミャンマーを訪れる機会があるため、直接、学生達にこの奨学金を手渡しで支給することが出来ている。毎年学生達を交歓会に招待し、この直接手渡しの支給で、「顔が見える、顔が見られる奨学会」となり、彼

らの悩みや心配事、そして夢を聞くことが出来、支給する我々側にも喜びをもたらしてくれている。

もちろん学生達も年1回我々に会えることが嬉しいようで、半年に1回のレポートにも全学生からいつも「何時来るか」を聞いている。



この学生達は優秀で、大学入学当時の英会話は我々の方が優れていますが、2年生になると我々の英語力は、彼らに数段劣ります。それは若さに加え、医科大の授業では、全て英語で進められるようで当然ながら英会話や文法は習得が早いようだ。また、大学は全て国立であるため医学・歯学生は卒業後2,3年間、僻地医療に携わることが国の義務として課せられている。しかし、これが劣悪の待遇らしく、我々も心配しているところだ。

是非、彼らの若さで、これらの苦難を何とか克服してくれることを願っている。

最後に

この奨学会の主旨に賛同いただける方、是非入会を!

(記:2006年1月)



親愛なる「あおい奨学会」の皆さんへ

チャータングアオンです。私は、この奨学金を得られなければ医科大に進学できませんでした。ですから今とても感謝しています。この奨学金は、私にとって授業料や生活費の心配をなくし、安心してマグエ医科大で学ぶことが出来ます。両親も感謝しています。この恩に報いるためにも立派な医師になるよう努力します。また皆様方とコミュニケーションが取れるよう日本語も勉強します

2002年12月13日

Mya Thada Ohn

# ミャンマーでの広報活動

◎ ミャンマー国内向けに作成したビルマ語の広報誌。関係者経由でシュエボ地域に200部配布した。



◎ 裏面は日本語で作成、一部内容は異なる。2003年発行



Library KIBOH  
 Founded by AOI Myanmar Foundation Inc.  
 President: Chitara Aung-Thayer Club  
 6533 Langham Road

NOVEMBER 2004

**ဆိုကာစက်ကော့နန်းစေတီတာလိကလပ်နှင့်မြန်မာပြည်**




ဆိုကာစက်ကော့နန်းစေတီတာလိကလပ်သည် အထွေထွေအားဖြင့် အိန္ဒိယနိုင်ငံ၊ ဟိမာချယ်မြို့တွင် တည်ထောင်ခဲ့ပြီး နှစ်ပေါင်းများစွာကြာလာပြီဖြစ်သည်။ နှစ်ပေါင်းများစွာကြာလာပြီဖြစ်သော်လည်း ဆိုကာစက်ကော့နန်းစေတီတာလိကလပ်၏ အဖွဲ့ဝင်များသည် အိန္ဒိယနိုင်ငံ၊ ဟိမာချယ်မြို့တွင် တည်ထောင်ခဲ့ပြီး နှစ်ပေါင်းများစွာကြာလာပြီဖြစ်သည်။

**စိဘိုးစာကြည့်တိုက်မှအနာဂတ်သားကောင်းရတနာများသို့**



The 4-Way Test  
 1. Is it the TRUTH?  
 2. Is it FAIR to all concerned?  
 3. Will it build GOODWILL and BETTER FRIENDSHIPS?  
 4. Will it be BENEFICIAL to all concerned?

The Director sets the standards for Kiboh in Myanmar business and professional fees because the goals for sales, production, service, and all conditions that require strict adherence, and the success of the company is related to the above philosophy.

**မြန်မာနိုင်ငံကျောင်းများအတွက်ကျောင်းစာကြည့်တိုက်ဆောက်လုပ်လှူဒါန်းခြင်း။**






ဆိုကာစက်ကော့နန်းစေတီတာလိကလပ်သည် အထွေထွေအားဖြင့် အိန္ဒိယနိုင်ငံ၊ ဟိမာချယ်မြို့တွင် တည်ထောင်ခဲ့ပြီး နှစ်ပေါင်းများစွာကြာလာပြီဖြစ်သည်။




ဆိုကာစက်ကော့နန်းစေတီတာလိကလပ်သည် အထွေထွေအားဖြင့် အိန္ဒိယနိုင်ငံ၊ ဟိမာချယ်မြို့တွင် တည်ထောင်ခဲ့ပြီး နှစ်ပေါင်းများစွာကြာလာပြီဖြစ်သည်။






**AOI MYANMAR FOUNDATION SCHOLARSHIP**

**AMFS**

AMFS သို့ ဝင်ရောက်ခြင်း

AMFS Application

Requirements:  
 Are you able to speak in English?  
 Do you have financial need?  
 Do you have a strong desire to continue your studies at university?  
**If you answered "Yes" to all three questions, you are eligible for the AMFS.**

Obligations:  
 If you receive the AMF scholarship, you must:  
 1) submit a report every 6 months to your sponsor,  
 2) study the Japanese language,  
 3) meet AMF members in Myanmar next year.  
**If you do not fulfil your obligations, the scholar-ship can be terminated.**








**12.FEB.2004 PHOTO ALBUM IN YANGON**



























# 私設奨学金制度 あおい奨学会の奨学生たち(1)

2001年より「あおい奨学会」が支援している15名の学生達をご紹介します。  
すでに大学を卒業して医者や主婦になっている子もいます。(2012年9月現在)

支援開始年度 ※スポンサー	写 真	名前・年齢 卒業または在学大学	支援開始年度 ※スポンサー	写 真	名前・年齢 卒業または在学大学
2001 小野智範氏		ミヤア タンダ オン Mya Thandar Ohn  Institute of Medicine- Mandalay マンダレー医科大学 卒業 医師 31歳	2001 太田政信氏		パイパイピョー PYI PYI PHYO  Shwebo University シュエボ大学物理学部 卒業 主婦 31歳
2002 近藤正俊氏		ネ ユ ルウィン NAY YU LWIN  Institute of Medicine, Magway マグエ医科大学卒業 医師 30歳	2002 京 幸一氏		タンダーソー Thandar Soe  Institute of Medicine, Magway マグエ医科大学卒業 医師 30歳
2003 中根常彦氏		テッ テ レン HTET HTET LWIN Institute of Economy, Monyuwa モンユワ経済大学修士 課程 卒業 銀行員 29歳	2004 市川聰明氏		ココタイン Ko Ko Thine  Institute of Medicine, Magway マグエ医科大学卒業 医師 28歳
2006 天野邦彦氏		テン リン アウン Htein Lin Aung  Institute of Medicine, Magway マグエ医科大学卒業 医師 26歳	2006 加藤豊生氏		ヤン アウン Yan Aung  Institute of Medicine, Magway マグエ医科大学卒業 医師 26歳
2007 千賀邦二氏		キンタンダーシュエ Khin Thandar Swe  Institute of Medicine, Magway マグエ医科大学業 医師 25歳	2007 太田政信氏		ソーサントン Soe San Tun  Institute of Medicine, Magway マグエ医科大学卒業 医師 25歳

※ 奨学会では各学生に対し担当のスポンサー（会員）を委嘱しています。学生から各スポンサーへは手紙、電子メールなどで近況や報告などが届きます。学生に対し心の支えになって頂き、且つ彼らと精神的な交流をお願いしています。

# 私設奨学金制度 あおい奨学会の奨学生たち(2)

支援開始年度 ※スポンサー	写真	名前・年齢 卒業または在学大学	支援開始年度 ※スポンサー	写真	名前・年齢 卒業または在学大学
2008 近藤正俊氏		チュエピユイウイエ Kywe Pyae Wai  Institute of Medicine, Magway マグエ医科大学 研修医 22歳	2009 中根常彦氏		ミョウミンソー Myo Myint Soe  Institute of Medicine, Magway マグエ医科大学 5年生 21歳
2009 松永茂夫氏		テェ アカー Htet Arkar  Institute of Medicine, Magway マグエ医科大学 5年生 21歳	2010 足立 修氏		ピェ ピョウ アウン Pyae Phyto Aung  Institute of Medicine, Magway マグエ医科大学 4年生 20歳
2011 近藤正俊氏		スモンレイン Hsu Mon Lwin  University of Phar- macy, Mandalay マンダレー薬科大学 3年生 19歳			



我々は医学生達に「我々奨学会の目的は、君たちを支援することでミャンマーの貧しい人々を救うことができる。それは、我々は君たち数名しか支援できないが、君たちが医師になれば、何百人何千人を助けることができる。だから君たちは幸運な学生だ。恩返しは立派な医者になることだよ」と、いつも言っている。



ミャンマーは軍事政権の国。  
だが、医者なら政治とは関係なく地域で多くの  
人々を助けることができる。そんな気持ちから支  
援している。…… 一支援者より

# ミャンマー 紀行集



ミャンマーを訪問した会員などの方々より無理矢理？いや気持ちよく投稿を願  
い、ここに紀行文を掲載することが出来ました。感動したこと。困惑したこと  
などが素晴らしい文章で描かれています。

貴方も是非一度「微笑みの国」へ訪れてみては如何でしょうか？

## 「微笑みの国」ミャンマー訪問記

1. ある年の11月25日～12月1日にかけて、5回目となるミャンマー(かつてビルマといった)訪問を終えた、酒を飲むと人格が変わる大編集長Y・S先生が、これを聞きつけて、「Nさんが5回も同じ国を訪問するのは、何かよこしまな目的があるに相違ない」と思ったのか、私に対し、「今回は、支部報に、『ミャンマーも美女ばかり』の題名で投稿するように」とのお達しがあった。しかし大編集長の推察は、私の人間性を誤解している?というものであろう。

2. ミャンマーという国は、仏教国であり、仏教を中心として人々の生活が回っているといっても過言ではない。古くは、成功した人々は、パガンの地にパゴタ(寺)を建てるのが夢であり、パガンの仏教遺跡群が生まれた(パガンでは、イラワジ川をひかえた大平原に、2000ともいわれるパゴタが林立している)。



ここで見る夕陽は「パガンの夕陽」として超有名であり、しばし時の経つのを忘れさせる。現在でも、人々は寺へ寄進するのがあたり前とされており、さらに貧しい人々に奉仕をすることは、むしろ豊かな人々の努めとされ、奉仕できた人が奉仕できたことを感謝しなければならないとされる。



もちろん、家族、親族、そして地域の人々同士の相互扶助の精神は、生きついでいる。「ビルマの竖琴」を、読んだ皆さんは、ミャンマーの人々の暖かさを感じるであろう(ミャンマーの人々は、敗走する日本兵をみかね、侵略者である日本兵を手助けした)。

3. 「微笑の国ミャンマーというのが旅行会社の宣伝文句になっているように、人々の「微笑」が素晴らしい。特に女性の「微笑」は最高である。私が、これに大いに惹かれていることを考えると、大編集長の上記の推察は少し当たっているともいえない(はない)。人々は慎み深く、謙虚である。戦前の日本人のよい所を感じさせる。男性が女性を口説くには、約2-3年の月日を要する。女性からはアプローチできない。男性が必死に口説き、やっと女性は重い腰を上げるのである。



4. 私がミャンマーを訪れるようになったのは、私が所属するロータリークラブが、ミャンマーでの奉仕活動(ロータリークラブでは、こ



第1～6・8回訪問  
会員 中根常彦君

れを世界社会奉仕活動、略してW・C・Sといっている)をはじめ、私も参加することになったからである。

最貧国の一つであるミャンマーではあるが、国民の教育にかたむける情熱はすごい。学校はちゃんと存在するのだが(5-4-2制)、何せ政府が教育に金を出さない。校舎は老朽化の一途である。ここで「希望」という名の図書館をつくらうという活動をするようになったのである。4000ドル位で40坪並の建物ができてしまう。



5. 又、同時に、プライベートなグループで、大学生に奨学金を出そうという運動もはじめた。現在5名の奨学生に奨学金を送っている。原則として医学部に進む大学生を選んでいる。

ミャンマーでは、大学が完全に格付けされていて、統一試験の成績が国レベルで1～550番位までがまず医学部に進学できる。かつての司法試験のようであるが、最近では医師になっても国外へ行ってしまう人が多いため、2000名位にまで枠を拡大したようであるが、それでも極めて医学部に進学するのは難しい。成績がよくて医学部に進めない子を1人でも2人でも援助できることを願って、奨学金を送ることにしたのである(医師に比べて、これらの途上国で我々法律家の役割はどうしても見劣りしてしまう)。1年の奨学金はわずか300ドルである。しかし、400～500ドルあれば、医学部の学生が学費と生活費をまかなえるようである。



1～2回ゴルフに行くことをやめれば、これが支払いできる。我もと思う先生方は、どんどん申し出して欲しい。奉仕することは奉仕する人間の救済なのである。

6. 以上、今回はいささか真面目な文章で読者の期待を裏切った? かもしれないが、やはりミャンマーの女性の「微笑」は最高に美しいのである。

記:2003年

## ミャンマー初訪問で、 「驚き？」そして「感動！」

市川聰明会員の令嬢

2004年同行 市川 藍 さん

私は、祖父が早くからロータリーの活動をしていたので、幼稚園の頃からロータリーの家族旅行やクリスマス会に参加していました。小学校3年生で岡崎に引っ越して来てからは縁がなかったのですが、最近、父が城南ロータリーに入会させて頂いたのを機に、私も再び家族例会や英会話教室に参加させて頂き有りがたく思っています。今まで華やかな集まりばかりを見てきていたので、ロータリーの活動は、いろいろな職業の方の社交場所だと、思っていました。

今回ミャンマー訪問をすると聞いたときも、学生の私にとって

1. 海外しかもアジアを訪れる機会は滅多に無い。
2. 物価が安い国なので、父のお金で豪遊できる！？  
と言う気持ちで同行させて頂きました。

2004年2月12日にミャンマーに着き、想像していた国と違い思ったよりキレイで車が多いのに驚きました。そして、女の子達は小さくて細くて、化粧をしなくても十分キレイな顔立ちをしていて、そして何よりイキイキとした表情をしているのに、さらに驚きました。ミャンマーの人は美人が多いです。

2月13日、美しい人達と一緒に北ダゴン高校へ行きました。チピッコ音楽隊と沢山の花束に迎えられながら、この学校を見たとき、ビックリしました。「いつの時代の学校？」というのが正直な感想です。私の通っていた高校は古く、冷暖房が無く、壁はがれていて、最悪！！と影で言われていたのですが、ここを見たら私の母校は上流の部類に入れるかも・・・と思いました。



教室、机、椅子どれを取っても比べものになりません。そしてトイレなんて思い出したくないほど、スゴイ建物でした。皆様も一度ミャンマー式トイレを試してください！！一生に一度の経験になるはず。

今回の目的である図書館建設の費用が\$4,000(40万円強)というのに驚きつつも納得してしまいましたミャンマーの学校には日本の学校になら、必ずあるという用具や場所がありません。日本はとても恵まれていると思いました。そしてミャンマーにも有るべき物を作ろうとして、協力している皆様方を尊敬しました。

ミャンマーの学生は、日本の学生と違いました。

私たちを笑顔で受け入れてくれる心の広さ。学校には、勉強が好きだから通っているという気の持ち方。そして

一番になる為の努力を惜しまない根気の強さ。これら私を含めて実行している日本人は多くないと思います。また、ミャンマーの学生を見ていて、今までボランティアに興味がなかった私でも応援したいと思いました。ただ学歴が欲しいからと大学に通うのでなく勉強がしたいから通いたいと思っている人って見ていて気持ちがいいのです。だから、みんな目がまっすぐでキラキラ輝いていたのかも知れません。これは直接会わないと分からないことですが、一度彼らに会ったら、再度訪れたくなります。



ミャンマーマジックは、スゴイです。吸い込まれてしまいました。ミャンマーの自然はキレイです。

「雄大」という言葉

はこのためにあると思います。バガンに行って朝日と夕日を見ました。とお〜っても大きな光に包まれてしまいました。遠くにあるはずなのに、近くにあると錯覚してしまうほど大きかったです。ミャンマービューティーは自然の力も影響しているのでは。悪いことは出来なくなります。

心に残る景色、心に残る出会い

“来年もご一緒させて下さい！！”

(記：2004年)

# ミャンマーの呼吸

牧野正高会員の令嬢

(2005年同行) 牧野 暁世さん

ヤンゴンに降り立ったのは日も暮れ  
きった頃であった。生まれて初めて  
訪れるこの土地は、もうすっかり  
真っ暗だ。辺りを見渡し、なんて寂  
しい首都なんだろうと思わずにはい  
られなかった。



2005年2月3日から3泊5日の日程で行われた第7回ミャン  
マー訪問の話をお願いしたのは、ちょうどその10ヶ月前  
のこと。二つ返事で参加を希望して以来、未知の国への  
想いが膨らんでいた私は軽い落胆を抱き始めていた。乗  
り込んだ送迎バスの窓から、流れていく景色を眺めてみ  
る。  
何も見えないのだ、いや、何も無いのか。次第に目が慣  
れてくるとぎょっとした。暗闇に蠢く群衆。  
かすかな灯りに群がって路上のあちこちで食事をとって  
いる。



よく見ると、数え切れない  
程の飲食店や商店が軒を連  
ね、それらは目下営業中  
であった。  
夜の街を大人も子どもも平  
気な顔をして闊歩している  
姿に、さっそく私は不意打  
ちのミャンマーショックを

食らってしまったのだ。

だが、この明るさに慣れると街の活気が見えてくるの  
だ。後で知ったのだが、熱帯の地域に住む人々にとって  
夜は絶好の活動時間なのだそう。そして何より、日本  
の夜が明る過ぎたらしい。

ミャンマーの昼の街。ス  
カートの風を切って走り  
去っていく自転車の群れ。  
車体が膨らむほど人がぎゅ  
うぎゅうに押し込まれたバ  
ス。お祭りのような色彩と  
豊かな物資が溢れる市場。



砂埃が舞い上がるガタガタ道。編んだ木の皮でできた  
家。高い空。黄金に輝く仏塔。人間達の営みには無関心  
な放し飼いの犬。悠々と草を食み、時の流れに鎮座する  
牛達。どこかで見たあの情景はここだったんだと、不思議な懐かしさすら感じるような国だ。人々は働き、学校  
に行き、お茶を飲み、読書し、談笑している。外国人の  
私にはそれがとても羨ましかった。  
ある時、バスの窓越しにマングレーパレスを護衛する若  
い兵士と目が合った。彼が腰掛けるベンチの足元で2匹の  
子犬がすやすやと眠っている。黒光りする腰の拳銃とは  
対称的に、彼は眩しいほど白い歯を見せて私にニカッと

笑いかけながら親指  
と小指を突き出し、  
鈴のように振るしぐ  
さをしてみせた。

「彼がしているのは  
どういう意味？」奨  
学生の女の子に聞いて  
みた。クスリと笑  
い、「愛してるよ  
つて意味よ。」彼女たちはそう言って、またクスクスと笑い  
合った。

お返しのもりで、カタコトのミャンマー語で彼女たちに  
「恋人はいる？」と聞いてみると、コトバとは裏腹に花が  
咲いたような笑顔が答えてくれた。そんな彼女たちに帰国  
後、すぐに手紙を送ることになる。こんなにシンプルな方  
法で心が通じていくんだと、感動さえ覚えながら。



「発展途上国」と言われるミャンマーに、私たちが住む国  
では見つけることのできないものを垣間見たのは私だけ  
ではないはずだ。実際、私が日本から持ってきた価値観は、  
ミャンマーに到着したときから全く役立たずだったのだ。  
空気が違えば呼吸も違う。そして、私たちがこの国に貢献  
できることがあっても、彼らの呼吸の速さはやっぱり自由  
でいてもらいたいと思う。

そんなことを願うと  
き、何故だかあの幸  
せそうに眠る子犬た  
ちが記憶に蘇ってくるのである。ミャン  
マーの呼吸に、また  
いつか出会えたら  
いい。



(記：2005年)

# ミャンマー訪問記

以下は、2005年2月3日から7日までのミャンマー訪問記である。

## 遠い国ミャンマー

ミャンマーは遠い。距離よりは時間的に遠い。名古屋空港からタイのバンコクまでが6時間、バンコクでの乗り継ぎ時間が3時間半、バンコクからミャンマーの首都ヤンゴンまでが1時間半、飛行機による所要時間のみで合計11時間だ。日本からの直行便は、名古屋は言うに及ばず成田からも関空からもないとのこと。どうしても行き帰りだけでそれぞれ1日を覚悟しておかなければならない。

バンコク国際空港は知る人ぞ知る東南アジアのハブ空港なので、乗り継ぎ時間を使った楽しみが色々ある。その一つがマッサージだ。空港内に何軒かのマッサージ店があり、どこも繁盛している。われら訪問団一行も近藤正俊隊長に誘われてフットマッサージを試してみた。料金は1時間で18米ドル。大体1分当たり100円の日本に比べると、1/3からせいぜい半分の値段である。マッサージ師はほとんどが女性で、腕前もなかなかのもの。身動きできないエコノミークラスの座席と機内の低い気圧のためにむくんだ両足を気持ちよくほぐしてくれる。世界を股にかけて仕事をしているビジネスマンなどには重宝がられるだろう。

朝の6時半に家を出て、ヤンゴン市内で夕食をとった後ホテルにたどり着いたのが現地時間で夜の10時頃、時差はマイナス2時間半だから、約18時間かかったことになる。明日の目的地はシュエボという田舎町。早朝4時半の出発のため、ホテルのバーで一杯、との計画も諦めて荷物の整理後早々にベッドに入る。

## シュエボの町

目的地シュエボは、ギリギリ日帰り可能な町だ。ホテルを朝4時半に出発。ヤンゴンから北へ向かって内陸の都市マンガレーまで飛行機で約1時間半。マンガレーは日本ではさしずめ京都のような町で、後にあらためて触れることにする。マンガレーからシュエボまでは、さらに北へバスで3時間半。距離にしておよそ160キロとのこと。

ヤンゴンを飛び立ったプロペラ機は、途中何人かの客を降ろすためにパゴダ(仏塔)の町バガンに立ち寄る。バガン上空にさしかかると、太陽の光を反射して金色に輝くパゴダが飛行機の窓からいくつか視認できる。高度が下がるにつれ、金色のほかにも白、あるいはかつては白だったと思われるパゴダがそれこそ無数に目に入ってくる。ああミャンマーは仏教の国だったのだと、心から実感する瞬間だ。バガン離陸後ほどなくマンガレーに着陸。バスに乗り込み、いよいよシュエボに向かって陸路の移動を開始する。マンガレーからシュエボまでのバス旅行は、ミャンマーの農村と田舎町を安直に見学するには最適だと思った。以下は車窓からの印象。現地の人々と直接触れ合ったわけではないので、物見遊山の観光客ゆえの思い違いはご容赦を。



2005年訪問(第7回)

会員 牧野正高 君

道は見渡す限りの農地や草原から1メートルほど土を盛り上げて造られており、両側に植えられた街路樹から大きく枝がかぶさって、道路周りが日陰になるように工夫されている。中央の部分に簡易舗装が施されており、バス、トラック、オートバイ、さらに町に近づくにつれて急に増えてくる自転車はこの部分を走る。舗装の幅はバスやトラックがやっとすれ違うことの出来る程度だ。その外側には左右とも未舗装の部分が設けられており、時折牛に引かせた荷車が土ぼこりを巻き上げながらのんびりと行き交っている。そんな街道が何十キロも延々と続くのだ。

点在する農村部にさしかかると、道路の両側には木柱、板壁、草葺の農家が適当な間隔を置いて建っている。高床式の住居も多く、雨季にはあたり一面水につかる光景が目につく。電柱や電線は見えないため、電気はなさそう。無論水道もないだろう。今は農閑期なのか、昼間から家の周りで所在なげにしている人々の姿が目につく。



街道に沿って数十キロに一つくらいの間隔でちょっとした町がある。さしずめ江戸時代の宿場町のような感じだ。簡単なテーブルと椅子を置いた飲食店や小さなショーケースに色々な品物を並べた小売店が何件か軒を連ねている。町は賑やかであちこちに多くの人影が見えるが、午前中のせいか店はどこもヒマそう。モノ作りの作業所は少ないけれど、トイレ休憩に立ち寄った場所にたまたま鍛冶屋があって金属をたたき音がしている。主人と思いき男性がバスやトラックの廃材の鉄板をハンマーで打ち伸ばして、日本で言うところの衣装缶を作っていた。

町で見かける工業製品(衣装缶が工業製品かどうかは別として)はほとんどがリサイクル品か中古品である。一見の訪問者に分かりやすいのはトラックやオートバイ、自転車で、特にトラックはそのほとんどが日本製の中古車だ。話はそれるが、ヤンゴン国際空港でお客を乗せて出発・到着ロビーと飛行機の間を往復するバスの車内には「お降りの方はこのボタンを押して下さい」と日本語で書かれたプザーが付いていた。いたずらに押してみたものの、予想通り音は出なかった。

私は元来乗り物好きなのでバスの旅も全く苦にならず、車窓からの景色を眺めていることはとても楽しい。しかし、道路が簡易舗装なのに加えてドライバー氏がかかり飛ばすため、次第に腰が痛くなり乗客の口数もめっきり少な

くなってくる。もうそろそろ限界かというところで、やっと目指すシュエポに到着した。

同行のミャンマー通氏の説明によれば、シュエポの人口はおよそ10万人、その地方の中核都市の地位にあるらしい。都市といっても雰囲気は大きな田舎町という感じで、街道に面して店や家が建ち並び、さらに街道に交わる何十本かの未舗装の道路に沿って多くの家がひしめき合っている。いまさら言うまでもなく、このシュエポの高等学校に図書館を寄贈するというのが今回の旅の目的である。

シュエポでは、4000米ドルで図書館が建つ。わが岡崎城南ロータリークラブでは数年前からミャンマーの学校に図書館を寄付する活動を行っており、今回で4回目を数える。あらかじめ日本から送っておいたお金を使って現地で図書館を建ててもらおう。その寄贈式に出席するための訪問団の一員として、初めて私もミャンマー旅行の機会を得たわけだ。

私の職業は税理士である。2月というのは会計事務所がいよいよ確定申告に向けて忙しくなる時期で、当初は休暇をとることに不安もあったが、こうした用事でもなければミャンマーという国を訪れるチャンスなど滅多にあるものではないと、腹を決めて参加することにした。さらになぜ2月かと言うと、この時期ミャンマーは乾季で、旅行に最も適したシーズンだからだ。

シュエポには少なくとも三つの高校がある。どの学校もグリーンがシンボルカラーのようで(ということはおそらくすべて公立学校なのだろう)、先生や生徒の制服には深緑色が使われている。平均的には決して豊かとはいえない暮らしむきのようなが、式典で出会った子供たちは皆澄んだ美しい目をしていた。

クラブが寄贈した図書館は小さな一軒家という感じで、2室に分かれており閲覧用のテーブルと椅子、それに扉つきの本箱がいくつか置いてある。本は少ししかなく、どれも古い。図書購入代として別に1,000米ドルを寄付したのだが、これでどれほどの新しい本が購入できるかは聞きそびれてしまった。

学校内を散策。中庭では子供たちがサッカーらしき球技をして遊んでいた。子供の遊ぶ光景は万国共通だ。長屋形式の教室には屋根はあっても床がなく、地面がむき出しになっている。3人掛けくらいの木の長テーブルと長椅子が並んでおり、前の壁には黒板が取り付けられている。照明器具はない。授業はすでに終わっていたが、この教室で学ぶ子供たちが是非とも将来のミャンマーを背負って立つ大人になって欲しいと思った。

今夜のホテルはマンダレー市内だ。その日のうちに帰らなければならない。また3時間のバスの旅が待っている。

シュエポでの滞在時間はわずか4時間足らずだったが、私にとって忘れられないひと時となった。なお、この間わが訪問団以外の日本人はおろか、外国人には唯一人も出会わなかったことを付け加えておく。



室に分かれており閲覧用のテーブルと椅子、それに扉つきの本箱がいくつか置いてある。本は少ししかなく、どれも古い。図書購入代として別に1,000米ドルを寄付したのだが、これでどれほどの新しい本が購入できるかは聞きそびれてしまった。

## 古都マンダレー

マンダレーは古い都だ。町の真ん中北寄りに王宮跡がある。かつてイギリス軍に滅ぼされた王朝の宮殿だったとのこと。敷地は一辺が3キロくらいの広大な正方形で、一番外側は満々と水



を湛えた堀になっており、これがぐるりとその内側を取り囲んでいる。シュエポへの行き帰りでは乾季の農地や荒原を見慣れていたため、いったいこの大量の水はどこから来るのだろうと不思議に思える。

東側の入り口から宮殿の敷地に入ることが出来る。軍が管理しているようで、堀を渡ったところでキョー・キョー・モー氏がバスから降りて受付係と思しき制服姿の兵士と何やら話した後(多分入場料がいるのだろう)、バスは城壁をくぐる事が許されて宮殿内にしずしずと進んで行く。敷地の中には意外にも人々の日常生活があり、驚いた。木立に寄り添うように幾棟か住宅が並んでいて、道沿いには移動式の店を開いている者もいる。聞けば、住宅は軍人の官舎になっているらしい。

宮殿敷地の中央部分に見学可能な建造物群があり、そのうちの一つの円筒形をした監視塔に登ると、再建された金色に輝く王宮を見渡すことが出来る。建物はすべて木造だ。かつての宮殿は太平洋戦争末期にイギリス軍と日本軍との戦闘によってすべて焼失してしまったとのこと。ミャンマー通ではない私でも、旧ビルマに花開いた仏教文化の荘



厳さにいささかの感慨を覚えざるを得ない。

マンダレーのもうひとつの観光資源はマンダレーヒルのパゴダ群である。マンダレーヒルは王宮の北側にポッカーリと盛り

上がった小高い丘で、その全体がお寺になっている。あちこちにパゴダが林立し、昨夜泊まったホテルから見えた金色のパゴダも丘の最も高いところに位置するその内の一であることが初めて分かった。大きくて有名なパゴダにはエスカレーターやエレベーターが設置されていて、厳かな雰囲気とのアンバランスさにはちょっと笑ってしまうが、入り口との高低さもなかなかのものなので実際にはすこぶる有難い。

パゴダへ入るときには素足になるのがルールだ。最初は戸惑うが、慣れてしまえば裸足で1日過ごした小学校の運動会での感触が蘇って結構気持ちがいい。屋内ではヒンヤリと冷たく、陽の当たる戸外ではほかほかと暖かい足の裏が、ここがミャンマーの人々にとって大切に清浄な信仰の空間であることを感じさせてくれる。

観光客にとっての楽しみの一つは、その土地で開かれる市場を見物することだ。マンダレーでもダウンタウンにあるマーケットへ出かけた。まず遭遇したのが、鳥かごに小



鳥を十数羽も入れて往來で声を掛けてくる女性である。小鳥など買って持ち帰ることができないのに……と思っていたら、どうやら買った小鳥を空に放すと良いことがある、というようなことらしい。



同行氏が代金を払って挑戦、一羽が飛び立つと周りで小さな拍手が沸き起こった。東南アジアの他の町でも同じような商売があるようだ。

建物の中では、衣類や布などの繊維製品や金物などの日用雑貨の店が多い。物資はすこぶる豊富だ。店主は共同のマーケットにそれぞれ小さな売り場を占有し床から天井まで高く商品を積み上げて、時に客に声を掛けながら、時にその場で食事をしながらそれぞれのペースで商売をしている。地元の買い物客や観光客に加えて店向けの食べ物を売り歩く少年たちの行き来が交じり合い、狭い通路はかなりの混雑具合だ。うっかりすると迷子になりそう。

建物の外へ出ると、今度は野菜や果物などの農産物、今朝獲れたばかりの鮮魚やナマズの一種だという川魚の干物、各種の鳥や肉類、様々なスパイスなどを売る店がひ



しめき合っていて並んでいる。店と言っても、めいめいが一定の場所を確保した露店の集まりのような感じだ。ここでもモノの豊富さには驚かされた。とりわけ農産物は、その色彩の豊かさ、鮮やかさに目

が眩むほどだ。光景を油彩画にしたら賑やかで楽しい作品になりそう。試食に差し出されるままオレンジなどをつまんで食べてみるのも楽しい。水や食べ物にはくれぐれも気を付けなさいと注意されていたことなどこ吹く風、市場の喧騒の中で、ある種の醜態状態に陥ってしまう。いつまでも巡っていたい心地良さだ。

マンダレーでは多くの観光客を見かけたが、フランス人やドイツ人が多いとのことで日本人はあまりいないようだ。旅行会社の企画商品が少ないのかもしれない。でも古都マンダレー、間違いなくお勧めだ。

### エーヤワディー川の鉄橋

マンダレーからシュエポに向かってバスで数十分ほどのところに、エーヤワディー川(日本では‘イラワジ川’)の方が通りがいいという大河をまたぐ鉄橋がある。

エーヤワディー川は、乾いた大地を見慣れた目には脅威に映る。川幅は2、3キロもあるだろうか、今は乾季だというのに、満々とした土色の水が滔滔と流れている。ここが河口から数百キロも内陸に遡ったところだとはとても思えない。源流から河口まで、短い距離を急流で一気に入る日本の川とは趣を全く異にしている。

バスの窓越しに見下ろす限り、水の流れはかなり速そうだ。これほどの大量の水はいったいどこから来るのだろうか。マンダレーの王宮を囲んだ豊かな堀の水を見たときと同じ驚きだ。ひょっとしたら、二つの水は繋がっているのかも知れない。

インワ鉄橋と名付けられたいかにも無骨な感じのトラス構造の長大橋は、軍が管理しているようだ。近藤隊長が写真撮影はご法度だと言っていた。マンダレーからシュエポへの行き帰り、バスでこの橋を2度渡った。真ん中に鉄道の線路が走り、両側に1車線ずつの車道が設けられている。バスは数分かかってこの鉄橋を渡り切る。途中オートバイや自転車を追い越す。車道が狭いため、眼下に川面を見た追い越しはスリル満点だ。

途切れることのない大河の流れには不思議な感動を感じる。再びミャンマーを訪れる機会があったなら、その時もまたインワ鉄橋からエーヤワディー川を眺めてみたい。

### ミャンマーのビール

ミャンマーでは、ミャンマービールとマンダレービールという名の2種類のビールを味わった。ホテルにはシンガポールなどでお馴染みのタイガービールもあるが、やはり郷に入れば郷に従え、飲むならその土地の酒に限る。水にはくれぐれも用心せよ、との先達の教えを忠実に守って、水分はもっぱらビールで補給することに最初から決めていた。

もっとも、本当の喉の渇きは水以外では癒されないのだけれど……。



緑のラベルのミャンマービールはどちらかといえばスッキリ系で、さっぱりと飲みやすい。これに対して青のラベルのマンダレービールは香りが高く濃厚なコクがある。私はマンダレービールがお気に入り、朝食を除くほとんど毎食、近藤隊長やモー氏に銘柄指定で注文してもらって飲み続けた。食事は主にミャンマー料理と中華料理だが、いずれもビールに良く合う。幸い食べ物と飲み物には全く違和感を覚えなかった。

ビール好きの妻のために、現地でミャンマービールとマンダレービールをそれぞれ2本ずつ買い、ピンが割れないようにTシャツにくるんで日本まで持ち帰って来た。家の食卓で居ながらにして異国情緒が味わえるのだから、こんなに楽しくて安い土産物はない。

(記：2005年)

# ミャンマー旅情

ミャンマーへ何度も行かれる近藤、中根、田中、市川氏。何故か・・・？ WCSの図書館寄贈？ あおい奨学生の援助？ 実はそれは、ほんの一部。これを機に彼らは日常の「世俗の色と欲に塗れた自分自身の心の垢」を洗い流しに行くのだ。新同行者の天野氏、特に岡田氏もミャンマーの素朴で清純な心とともに帰国した。以下紀行報告。

暗いヤンゴン空港。ローカル鉄道の駅舎並だ。恐ろしく時間のかかる入国手続。「こんなに時間が？」「いつもの事です」と中根氏は平然。私は限界だ。

税関では賄賂の請求。国際弁護士？の中根氏、あざやかに近藤氏に押し付ける。

全く狭い夜の空港前の雑踏、ボロ車の渋滞、テレビの後進国の映像の世界へ入ったようだ。早くベッドで眠りたい。明朝4時起床だとか・・・。

翌2日目。灼熱の空の下、バガン空港には、あおい奨学生たちが乾燥した道を何時間もかけて出迎えに来ていた。何度も来ている近藤氏他3名には1年ぶりの再会。自分の子供達に会ったような親密さだ。皆スリムな美人とハンサムな男子。しかし不良オヤジを寄せ付けぬ聡明さと純朴な目。いつかミャンマーを背負う人になる・・・オヤジ達の夢だ。

バガン地元の生活市場。土埃に塗れた人、人、人。牛車に馬車。雑踏の埃。野ネズミの天日干。蠅のたかった生魚、家畜の生肉、氷なんかない。日本では捨てられるような野菜、果物、汚い手、悪臭。しかし、人々の逞しさ。私は、ここでは生きていけない。戦前、戦中生まれの人達なら多分・・・大丈夫だ。

3日目。乾いた荒野をバスは砂塵をあげてマグエへ走る。途中の農村。家とはいえない小屋、バラック。死んだように寝そべる犬達、痩せた牛、逃げもしない豚や鶏。土に汚れた子供。音の無い無声映画のようなミャンマーの風景。

バスは第一高校の門をくぐる。拍手、大歓声。いったい今日は何かがあるというのか？ 校庭には千人近くのロンジー姿の子供達。ひょっとして我々への歓迎か？ 両側から多数の生徒達の拍手、寄贈する真新しい立派な図書館まで緊張して歩く。建設費僅か50万円ポッチで・・・いやクラブ会員の浄財だ？ と思いつつも私が出したのは義援金としてクラブで集めた3千



可愛い高校生を捜してスナップ

円のみ。これで、この大歓待を受けるのは私には背中がこそばゆい。そこは田中さん、大統領のような貫禄で、にこやかに生徒達に手を振り、鷹揚に歩く。最後尾から緊張してついて行く私など、まるでビルマ人の付き人。私の痩せた体も



2006年訪問(第8回)  
会員 加藤豊生 君

ミャンマーでは標準体型だ。此処の土臭い子供達の輝く目は遠い昔の私の目・・・。

4日目ヤンゴンに戻り「ほっ」とする。レストランへ。又だ・・・「ミャンマービール！」「ミャンマービール！」「マングレービール！」 席に着く前からスズメの子でもあるまいし。只でさえ、この国では肥満、髪が薄い、白髪、メガネの人は見ることがない。それに、この国の人は食事中は皆、静かだ。このグループはなんだろう？ 更に、どこのレストランもビールはすぐに持ってくるのにコーラ等はひどく遅い。近藤、田中、岡田、天野氏、この4人は私のコーラが来る前に、いつもビール2本は飲んでいる。中根氏に市川氏？この両氏は思いのほか食べ物にうるさい。この極貧国で・・・。全員出家、托鉢で糧を得るべし。この国では子供の托鉢僧も数多く見られる。



あおい奨学生ヤンアウン君

最後にエーヤワディー河。ミャンマーの大地を流れるこの河は薄黄色に濁る。純白のハスの花に座る御釈迦様、花の下は泥の水。この河はミャンマーの人々の喜び、悲しみを洗い流す。仏教心厚い純朴な人々は、貧困をものともせず遅く、いつかこの河の大

平原に花を咲かせる・・・。  
ロータリーのWCS活動が少しでも役に立てば幸いだ。  
過去8回この活動に熱意を持ち、ご尽力された近藤隊長はじめ各訪問メンバーに最大の賛辞を送り、心から敬意を表するものであります。また、この活動が今後も益々拡大することを願う一人でもあります。 (記：2006年)



仏像に溶け込む本人

エーヤワディー川



# 行ってきましたミャンマーへ。

今回岡崎城南ロータリークラブのWCS活動の一環であるミャンマー訪問に同行をさせて頂きました。

期待が80%、不安が20%の精神状態にて出発致しました。私自身飛行機に乗る事自体あまりありませんので大変嬉しくも有り、また、あまりの長時間飛行機に乗っているとエコノミー症候群になりはしないかと少し心配もしました。中部国際空港からの便は「タイ航空」で、タイ航空の機内は清潔で快適でしたが、何にも増して近藤正俊隊長をはじめ常に温厚で気遣いのある同行者の皆様と一緒にいると言う事が一番でした。。。。。

往路においては気力、体力共に十分な為、疲れなど一切感じず快適な空の旅となりミャンマーでお会いするであろうドクター・モー氏、あおい奨学生、訪問先の学校の事などあれこれと思いを馳せました。実際の所ドクター・モー氏（当城南ロータリークラブで米山奨学生として在籍していた時には一般にキョー・キョー・モー君と表現した方が分かりやすい。）とは米山奨学生時代に我がクラブにいた時にあまり話かけたこともなく、たぶんモー氏も私の事は覚えていないと思いますので「やあ、久しぶりだねえ」と言うのも大変おこがましいところがあります。で、どのような格好で最初の挨拶をして良いのやら軽く悩みました。でも実際に会ってみると大変気さくな人で日本語もうまく、尚かつ親切にいろんな事を教えてくれ、また諸事のフォローをもしてくれましたのでそんな心配は吹っ飛び、とても頼りになる人でした。モー氏には失礼ですがツアーコンダクターの方が職業としてむいてはいないだろうか。

現地の気温は高く、出発時の日本の最低気温が0度を下回る時に先方では最高気温が40度にも達しそうな勢いです。事前に近藤隊長さんより情報を頂いていたので体調管理は大丈夫だろうかと心配していました。しかしながら湿度が低いせいなのか、とても快適でした。私の体にはミャンマーの気温は合っています。

さて、現地の学校に到着した時にあまりにも多くの学生、生徒に出迎えをうけ正直なところびっくりしてしまいました。過去、何回もミャンマーを訪問している方の言われるところ、これだけの数のお出迎えははじめてだそうです。バスを降りると同時に合唱が始まりその列の中を歩いて図書館、校舎に向かうわけですが大変緊張を



しました。同行者の人はと見ていると皆さんリラックスしておみえで、堂々と歓迎に答えています。0さんあたりはかわいいい生徒さんの顔写真を



2006年訪問(第8回)  
会員 天野邦彦 君

撮っておみえです。個人的な趣味でありましょうか。生徒さんたちは皆おそろいの緑色のロンジー（一見スカート風のもの）を着ていましたが、その光景はやはり異国の地であるのだなあと感じました。（ただし一部の教室から出迎えてくれた少年齢の低い子供達は他の子供達より粗末な身なりをしており、ロンジーは着いていませんでした。）



講堂にて寄付の贈呈式が行なわれました。今回の参加メンバーはそれぞれ何がしかの役割を壇上に出て行なわれなければならない、また緊張の連続です。大勢の人を前に話

をする事は殆どのロータリアンの皆さんは慣れてみえる様ですが、私はこれがとても苦手。緊張のあまり気が遠くなってしまいそうでしたが、そこは精神力で耐えました。何を話したのかすっかり忘れてしまいましたが、事無く仕事を終了する事ができました。最後に田中さんが皆の注目を引くべく登壇をされたのはさすがです。モー氏の通訳によって我々のスピーチが進み何回かのセレモニーを終えて無事公式行事の一部が終了しました。

今回、鉛筆、ノート、服その他諸々を岡崎城南ロータリーの代表として高等学校へ寄贈したわけですがある一部の子供達にとってその物自体の貴重さは相当なものではないでしょう



うか。たしかにミャンマーの市街地においてはいろんな物品は売っており、手に入るとは思いますが先程目にした他の子供達と少し服装が違う子供達にはおいそれとは手に入れる事はできないのではないのでしょうか。（思い違いかもしれませんが）

私は今回のミャンマー訪問で初めて外国らしい所を見聞したと思います。見る物、環境、風土どれを取っても初めてづくしでとても良い勉強になりました。多大な御協力して頂いた会員の皆様、また同行して頂きました皆様に深く感謝いたします。

「近藤隊長、ご苦労様でした。カンバイ!」

(記：2006年)

# 「I love Myanmar. I love Magway.」



バガンからマグエ、5時間のバスの旅は楽しい。中部国際空港からバンコクまで5時間、トランジットが2時間、バンコク・バガン間が飛行機で2時間。これにバスの5時間を足せば移動に要した総時間は14時間、それだけかけて今回の目的地に着くのだ。私は交通機関に乗ると、なるべく目的地に着いてほしくない、ずっと乗っていたいという性格。マゾヒスティックな快感が心と体を満たす。



マグエ第一高校に着いた。バスを降りた瞬間今まで経験したことのない強烈な感覚が、私を襲った。小学生から高校生まで、2,000人の出迎えの列と拍手と歌声が私の五感を襲う。鳥肌が立つ。それはいやな感覚ではない。快感の極のようだ。毛沢東や金日成



になったような気分だ。田中角栄もこんな感覚を味わったのだろうか？

マグエ第一高校の図書館建設のセレモニーには、私にも役割が与えられていた。子供用衣服の贈呈である。ミャンマー初心者の私には軽い役割が割り振られた。先輩諸氏もそれぞれ出番があるのだが、私も含めてそのスピーチ内容は近藤隊長によりしっかり台本ができていた。みなさん日本語でスピーチし、それをキョーキョー・モー君が通訳する。台本があると本領を發揮できない私は、軽い緊張を覚えていた。

「今回、地域の恵まれない子供や生徒に、子供用衣服



2006年訪問(第8回)  
会員 岡田吉生 君

約80枚を持参しましたので、ボランティアグループの皆さん、彼らに配布をお願いします。」ベタに読んで15秒、う〜ん。アドリブ入れたら、近藤隊長いやがるだろうなあ。

式の終わり間際に私の出番が来た。それまで式は粛々と順調に進んでいた。



「今回、地域の恵まれない……」私は台本どおりに喋り始めた。すると目の前の席の近藤隊長がジェスチャーで「のばせ」の合図をしている。順調に

進みすぎてあっさり短時間で終わることを懸念してのことのようだ。

「……彼らに配布をお願いします。」原稿はここまで、さあ何話そう。

そのときなぜか英語の文章が頭に浮かんできた。

「This is my first visit to Myanmar. My impression of……」あれえ、英語で考えてるよと思いながら、それを頭の中で日本語に訳して話し始めた。

「今回は私にとって初めてのミャンマー訪問です。……ミャンマーの青い空、子供たちの澄んだひとみがとても印象的です。」(なんかつまらないなあ。ふつうだなあ。)笑いを取れないと酸欠状態になる私の特異体質が顔をもたげる。突然日本語に訳さず原文のまま口に出た。

「I Love Myanmar. I Love Magway.」

私には会場がどっと沸いたように感じた。隊長は報告の中で「すべった」と書いているが、私の意識の中では喝采に包まれていた。

調子に乗って「ミャンマー・マーボー天気予報」を歌おうと思ったが、やめた。

今後この旅の中で歌う機会もあるだろう。

(記：2006年)

# ミャンマー紀行 遺産

今回父からミャンマー訪問の話聞き、私は即座に「行きたい」と申し出た。理由は、妹が2度同行していることと、私自身旅行が好きで、アジアの中でもミャンマーを訪れる機会がめったにないと思ったからだ。私の知るミャンマーについての知識は、アウンサン・スーチー女史と軍事政権国家、そしてビルマの堅琴位だった。友人たちにも尋ねてみたが、ミャンマーに関してほとんどといっていいほど知識が無い。友人たちはこんな状態の私が果たしてミャンマーに何をしに行くのか？という疑問と不安を持ち続けていたようだが、それをよそに私は、少しの不安と大きな期待を胸に抱き、ミャンマーへと旅立つことになった。

ミャンマーの空港に降り立ち、辺りの暗さに驚いた。よく停電が起こるという記事を読んでいた私は「これが噂の停電か…」と一瞬思ったが、この国ではこれが普通の夜の明るさらしい。だんだん目が慣れてくると、遅くまで小さい子を連れて街を歩いている親子が目につく。日本で同じことをしていたら、やや冷たい視線を浴びることになるかもしれないと思ったが、熱帯地方であるミャンマーでは、暑い昼よりも比較的涼しい夜の方が活動しやすいのだそう（確かにあの暑さは半端ではない）。



景色も昔の日本を思わせる場所が沢山ある。都会暮らしの私にとって、満点の星空を見たときは息を呑んだ。また、人々の澄んだ瞳や笑顔、学生たちの目の輝きや心から学ぼうとする力に圧倒され、大学をただなんとなく卒業した私は恥ずかしくなった。また、バゴダを見学しているとき、ちょうど日曜日と重なったこともあり、多くの家族連れの人々をみかけた。ほとんどの人々がお弁当持参で、朝早くから夕方になるまでバゴダで祈りを捧げるのだそう。御先祖様を大切にするという習慣が薄れている今の日本とは違い、御先祖様を大切にすることを続けているこの国に私は感激した。この国は懐かしい匂いがし、私たちが忘れてしまった何かを取り戻させてくれる気がした。のどかな良い国だなぁと。



座して祈る

ただし、良いことばかりではない。疑問に思った点もあるので、そのことについて書こうと思う。

学校の図書館設立開館式典に出席させていただいた時のことだ。式が終わり、帰ろうとすると、校長先生が水が湧き出している場所へ案内してくれた。何故私たちに見せるのだろうか？水がもったいないじゃないかと思ひ、見せた理由を訊ねると、学校の下には地下水が通っているのに地下水をくみ上げる機械が無いのだという。その真意は機械購入の資金を要請するデモンストレーション



第5図書館KIBOH前にて



2006年訪問（第8回）  
市川聡明会員の令嬢（長女）  
市川麻耶さん

ンだったようだ。私は少し違和感を覚えながらも学校を後にした。



に気付いた。

話は変わるが、観光地に行くとき必ずといっていいほど子供たちの物売り攻撃にあう。中には旅行者の持っているお菓子などをねだる子供たちの姿も見られた。初めのうちは私もキャンディーを何気なく渡していたのだが、そのうちに「日本人＝必ず物をくれる人」という目で見られること

さて、先進国と呼ばれる国（人）が、発展途上国である国（人）に対して物をあげるといふ行動はどこからくるのだろうか。まずは同情心からではないだろうか。先進国としては発展途上国に対して良いことをしたという「自己満足」ができる。一方、発展途上国は、私たちはかわいそうだからなんでも貰えて当然なのだと言わんばかりに要求する。そこには、「自国で解決する前に他国に頼ろうとする体制」ができてしまっている気がする。



生活や教育は確かに重要なことだが、それ以上に重要なのは「自らつくり出す力」なのではないだろうか？

この国には、多くの自然や古き良き文化があり、子供達の輝いた瞳や純粋な笑顔がある。これらは決して失ってはいけない遺産と言える。援助の際にはそのことを忘れてはならないと思った。

(2006年2月 記)



親子仲良く、馬車に揺られる

## 11回目となるミャンマーを訪問して



式典で挨拶する田中氏

本クラブ創立10年目に当クラブ独自に始めたミャンマー教育支援プログラムについて振り返るとそのきっかけは、1997年米山奨学生として当クラブで受け入れたキョーキョーモー氏の故郷に何かを・・・とすることで進められた。当時ロータリークラブの無い国に対して国際奉仕活動を行うことは良いのかなどクラブ内で色々議論が出た。地区等に承認を貰いその後、現在まで続いている。今回で12回目になるが1回目は1999年ヤンゴンにあるアローン第5高校に学校の道路舗装工事を寄付、2回目は同高校の講堂等の修理費用を寄付、第3～7回までミャンマー各地へ5棟の図書館を、それらは図書館「KIBOH」と名付け建設し寄贈してきた。

このたび当クラブが創立20周年を迎えた2009年給水施設、道路整備、図書館など「物作り」からミャンマーで苦学している医学生のための奨学金制度である「奨学会KIBOH」を創設し、ザガイン管内の各地区より数名推薦を受け、当クラブにて成績を基に毎年2名の医学生を奨学生として決定し奨学金を贈る制度とした。昨年より始めその学生を入学から卒業までの5年間、一人当たり毎年五百～六百ドルを贈り、支援している。



今まではわれわれがヤンゴンからマンダレーに行き（航空機で約1時間30分）マンダレーから更にバスで約3時間かけてシュエボ地区等の目的地に行き、支援活動を行ってきた

が、今回、参加者は私を含め高齢者も多くなり、今回は奨学生達にザガイン管区シュエボなどから（約860km）高速バスを乗り継ぎ約12時間以上も



2010年訪問(第11回)  
会員 田中 暉登 君

かけてヤンゴン（旧首都）に来て貰った。彼らの中には生まれて初めてヤンゴンに来た学生も多く意外に結構、喜んでた。

奨学会「KIBOH」認証式・奨学金支給式は市内のレストランにて行われた。その式典後夕食会、会員の皆さんから頂いた景品でビンゴゲームを行い、学生達と楽しく過ごした。今回、クラブ会員から資金カンパを行い集まった73,000円でヤンゴンにて子供用図書を購入し、既にある図書館「KIBOH」5館へ寄贈した。



ミャンマーについて皆さんの知識としてどれだけ知っていますか？



マスコミの流すニュースなどで「治安が悪く」「旅行などしづらい国」だと思っ

ている人が多いと思うが、現実には仏教による宗教の信仰心があり、本当に親切で優しい人々が多く、また学生達は明るく素直な生徒ばかりです。この子達が一人でも多く医師になりミャンマーの人々のために活躍することを望む一人であります。

（記：2010年）



寄贈する図書に押すゴム印

# ミャンマー「モノより人への援助」



2010年2月11日から15日 岡崎城南ロータリークラブの世界社会奉仕活動(WCS)でミャンマーに行ってきました。今回2回目で、参加メンバーも前回参加者(ベテラン参加者)の隊長K氏、T氏、O氏、I氏と私の5人で少ない人数となりました。いつものように朝早くJR岡崎駅よりセントレア行きのバスに乗る予定でしたが、先に来ていたT氏とI氏が不安な表情で「バスがない」と叫んでいた。と、いえず私の車で東岡崎に行くことにした、そこには私たちの心配をよそに、K隊長とO氏が待っていた。まずは一安心……

ミャンマーへは直行便がない為、タイ経由になり、タイまで7時間ほどかかる。この間、飛行機に乗りなれていない私には、とても苦痛の時間である。エコミーのため座席が狭く寝るのも外の景色も見られずただ耐えるのみ。タイに着く1時間前に機内食が出る、それを食べて気を紛らわす。

タイからミャンマー・ヤンゴンへは2時間ほど、ヤンゴンへ着いたらもう真っ暗、夜7時(日本時間9時30分)であった。空港にはモー氏とその仲間が迎えにきていた。



早速夕食を、市内のレストランでとる中華料理だおいしいものもあるが、私の口に合わないものもある、いつものがらの試食会感覚で食べ始める。ただミャンマービールはとてもおいしい。次の日 朝早く目が覚める。時差の関係か早朝の4時には関わらず

ホテルの廊下が騒がしかった、朝一の飛行機でバガンに行く観光客かな? 前回観光でバガンに行ったがバゴダ遺跡と地平線に沈む夕日はとても感動した。

朝食を終えホテルのロビーでモー氏と会った、奨学生がヤンゴンに着いたようだ。彼らは10時ごろやってきた。早速日本からのプレゼント(デジカメ)を渡し片言の英語で操作説明をするがすぐに使いこなしていた。彼らも日本の学生たちと同じだなと思った。昼から学生たちとショッピングに行った店に入るときはボディチェックを受けるまた現地の人はバック預けてから売り場に入っていた、



2010年訪問(第10.11回)  
会員 松永 茂夫 君

万引き対策か? われわれはバックを持っていてもOKだった。

夕食時 奨学金支給の式典とビンゴゲームを楽しみ翌日遊園地、動物園観光を行った彼らには珍しいことだったようだ、20年前、自分の子供たちを連れて行ったことを思い出した。こうして特段の問題もなく帰国することができた。



2回の訪問でミャンマーが、少しづつではあるが経済発展をしていると感じた、道路の信号機にLEDのタイマー表示や ショッピングセンターには なんとIPODも展示してあった。しかし一番感じたのは、学生たちの生き生きとした目と明るい笑顔である。

観光としてのミャンマーも魅力があるがWCS活動を推進している我がクラブメンバーとして、学生たちに会えることにも楽しみを感じる。「モノより人への援助」彼らに援助し大きく育ってくれることを期待したい。そのときまたミャンマーへ行ってみたいと思う。

最後にこのような機会を作ってくださった隊長のK氏とWCS委員長のI氏 また理解ある城南ロータリークラブの皆様へ感謝いたします。(記:2010年)



# ～ 我が城南RCの 国際奉仕・世界社会奉仕プログラムだ ～



1999年～2010年まで12年間の長きに渡り、先輩諸兄により継続事業として引き続けられて来た。通学道路の整備に始まり、教室兼講堂の修理、5館の図書館の建設や図書の寄贈、給水設備の建築と続き、クラブ創立20周年を期に、「社会に役立つ人を育てる」をテーマに奨学金『K I B O H』を設立、さらに1999年発足の『あおい奨学金』（15名の奨学生）とあわせて一本化して以来、2010年2月現在卒業生を含む奨学生は19名に及ぶことは周知のことと思います。

今日までの奨学金総額は\$55,000-。さらに、会員から寄付された文具・子供服等を10kg入りの段ボールケースで55箱（600kg以上）を、現地ミャンマーに足を運び直接手渡してきた。



奨学金の支給



シュエボ第1高校でテープカット

1999年～2010年の12年間に11回のミャンマーへの訪問（2008年は政情不安の為中止）を行い、



2009～2010年度

WCS委員長

市川 聡明 君

延69名（会員63名と家族6名）が現地を訪れている

会員19名とその家族6名の人々が、どうして？

・遠くて

（岡崎発、ヤンゴンホテル着まで約15～16時間）

・熱くて（気温34度以上）

・埃っぽい（乾季のため、酷い砂埃）

・不衛生（水は雨水？ため池の水？川の水？）

・誘惑もスリルも存在しない国に

3泊5日の日時と一人当たり22万円近くの費用を費やして、何故に訪れるのか？

訪問回数	訪問会員年齢	訪問会員職業
10回	60歳	不動産
9回	68歳	家具製造
7回	58歳	弁護士
6回	70歳	新聞販売
"	64歳	新聞買取
4回	65歳	高僧
3回	52歳	市議
2回	63歳	製造
"	60歳	倉庫
"	60歳	印刷
"	59歳	事務機
"	56歳	産廃
1回	64歳	花火
"	62歳	眼鏡
"	58歳	税理士
"	55歳	テニス
1、2回		退会者3名
	計	19名



黄金に輝くバコタ、パガンの夕日に魅了されてなのかな？



マンダレーの夜空の星の輝き、インレイ湖の静けさ、チャイティーヨの自然の不思議さなのかな？



ミャンマー人々の生活の素朴さに昔の生活を思い起こすからなのかな？

どれをとっても日本では味わうことのできなくなった自然の魅力がこの国には残っている。



学校を訪問しているときの子供の笑顔、キラキラと輝く子供の眼、どんな宝石よりも心に残る光がそこにある。日本人の忘れかけている何かが、貧しくてもミャンマー人には残っているような気がする。

私も最初の訪問から何の事故もなく、6回の回数を重ねることができた。関係者に恵まれたこと、娘二人を同行できたことに感謝している。

ミャンマーという国の一部を知ってから、ではあるが、今までの自分にはない何かが心の片隅に芽吹いたような気がする。



私も、今年で64歳。あと何回ミャンマーへの訪問ができるだろうか？また、回数を重ねている訪問者は高齢



者が多い。来年からも我がクラブの継続活動と考えるならば、訪問者として40～50歳の若き？会員諸兄の参加をWCS委員長としてお願いをしたいと思います。

会員諸兄の皆さん！！

パガンの夕日と、子供たちの星空よりも美しい眼の輝きを、一度現地を訪れて味わってみてはいかがだろうか？

訪問によって、諸兄の人生観が変化するかも知れません。

～一度は行ってみようよ、ミャンマー～

最後になりますが、今年度の世界社会奉仕活動にご協力くださりまして、誠に有難うございました。会員の皆様温かい心遣いに心から御礼申し上げます。

また、事故・トラブルもなく訪問活動ができたことに同行者各位のご協力に感謝いたします。本当に有難うございました。

この事業が永く継続されることを願っています。また、皆様の健康を祈念いたします。

(記：2010年)



# ミャンマー・2013年の様子

既に大勢の先輩方が紀行文を執筆しており、正直に言ってネタが尽きている感があるが、なるべく重複しないように2013年のミャンマーの様子をお伝えしたい。

## 乾期のミャンマー

ミャンマーには暑期、雨期、乾期の3つの季節があり、私たちが訪れた1月下旬は乾期に当たる。

ミャンマーに旅立つ前に多くの方から暑いと聞かされていたが、実際に現地に着くと全く暑さは苦にならない。日中30度を超えることがあるが、日本の夏のような蒸し暑さはなく、カラッとしていてとても過ごしやすい。感覚としては北海道のような爽快な暑さだ。



大量に汗をかくことを覚悟して、シャツ・ズボン・下着などたくさんの着替えを持っていったが、ズボンなどは2、3日同

じものでも平気だった。北風が吹きすさぶ真冬の日本と比べると別天地のようだ。

念のために雨具も持参したが、これまた全く不要だった。モーさんいわく、乾期には絶対に雨が降らないそうだ。そんな話を聞いた直後、ヤンゴンでわずかながら小雨が降り、モーさんが絶句していたのはご愛敬。

むしろ、これから行かれる方は朝晩に15度くらいまで冷え込むことを心配された方が良いでしょう。長袖シャツや薄手のジャンパーのようなものがあると安心だ。



2013年訪問（第14回参加）

会員 永谷 和之 君

## ミャンマーの酒

湿度が低く快適だと言っても、日中は30度を超えるので暑い。そんな暑い季節に飲むと美味しいのがビールだ。

現地で飲んだのは、ミャンマービール、タイガービール、マンダレービールの三種類。飛行機の中ではシンハービール（タイのビール）が出てきたが、ミャンマーでは一度もお目にかからなかった。

ミャンマービールは、何とも表現し難い独特の風味があるが、3種類の中では最もライトなビールだ。現地ではとてもポピュラーで、どこの店にも置いてあったし、街頭にもよく看板が立っていた。

タイガービールは、日本の麒麟ビールにとっても似ている。青いラベルがドライな印象を与えるが、実際の口当たりはそれなりにコクがあって美味しい。

私が一押するのはマンダレービールだ。日本のエビスビールを彷彿とさせる濃厚な口当たりが特徴で、聞けば、本場ドイツから職人と機材を持ち込んで製造を始めたとのこと。その説明を聞いてなるほどと納得した。ただ、その後、軍事政権がこのビール工場を接収してしまったらしい。ミャンマーらしい話だ。

モーさんにビール以外の地酒はないのか尋ねたが、現地にはいかがわしい酒しかなく、とても健康の保証ができないとのこと。チャレンジしたい気もしたが、ミャンマー初心者身なので今回は遠慮した。



## ミャンマーの交通事情

現地の交通事情についても先輩方から色々聞かされて（脅されて？）いたが、実際に言ってみると、これまた何ということはない。

入国してから出国するまでの5日間は、飛行機での移動を除いてバスで移動することが多かったが、

舗装されていない道というのは一度もお目にかからなかった。地方へ行くとセンターラインもないような田舎道だが、ちゃんとアスファルトで舗装されており、ガタガタと揺られていくようなことは一度もなかった。



日本と異なり自動車は右側通行とされているが、町を走っている車のほとんどが日本製の中古車で右ハンドルという点が印象的だった。これだけ日本車が多いなら左側通行にしたらどうかと思うのは私だけだろうか。

また、同行した先輩方の話では、1年前と比べてもかなり自動車が増えているらしい。そのせいで渋滞は激しくなっており、ヤンゴン市内の移動はかなりの時間を要した。ある交差点では信号が変わるまでに20分近くもかかった。その渋滞の最中、ピーナッツの大きな包みを頭に載せた売り子が、信号待ちの車の間を歩き回って商売している様子は面白い。それだけ激しい渋滞でも、誰も怒ることなく待ち続けているのは、ミャンマーの国民性なのか、それともピーナッツのおかげか。



## ミャンマーの奨学生

国際奉仕活動としてミャンマーに行っているの  
で、最後に奨学生のことを紹介したい。私が今回初めてスポンサーをさせていただき、私が受け持つことになったのは大学1年の女子学生だ。マンダレーの空港で初めて会ったとき、流暢な日本語で「私の名前はピーピュータインです。」と自己紹介したのには驚いた。この彼女の日本語力は近藤隊長も感心することしきりだった。ある日、彼女に何年くらい日本語の勉強をしたのか尋ねてみると、驚いたことにたった2ヶ月しか勉強していないという返事。勉強がとても好きだと笑顔で語る彼女が印象的だった。

そんな学生たちに接すると、どうして先輩方が15年にも及ぶ援助を続けてきたのか本当によく分かる。

初めての訪問でこれだけミャンマーを満喫することができたのは、モーさんや近藤隊長を初めとする大勢の方に気を遣っていただいたおかげです。この場を借りて改めて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

また色々ご心配をおかけしたことも、この場を借りてお詫び申し上げます。



# 不思議な国ミャンマー

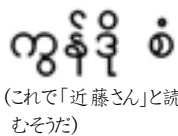
昭和30年代初め日本にはまだ自動車も少なく、道路も幹線道路以外大半が未舗装。テレビもまだ無ラジオだけ、子供は雑貨屋でガラス箱に入ったあめ玉を買い、道路には八百屋、魚屋からはみ出たナス、カボチャや魚が並ぶ。停電もチョコチョコありロウソクで過ごした夜もあった。町内の祭りは大人も張り切って盛り上げていた。子供達は空き地や畑で元気よくチャンバラごっこや鬼ごっこで遊んでいる。雨が降れば、道路に水たまり。そんな光景を思い出して下さい？それが今のミャンマーです。私は6~7才の時の記憶が蘇り、タイムスリップしたような不思議な気分でした。でもミャンマーの車は昔のスタイルでなく15年前の日本の中古車ですが……。



さて2000年2月、初めてミャンマーを訪れた。夜7時にやっと着いたヤンゴン国際空港内は真っ暗、ちょうど停電であった。ロウソクの光の下で入国審査。もうここでミャンマーの洗礼を受けた。というのは、入国審査で1時間、ターンテーブル

で荷物を待ち1時間、加えて税関で30分、何でもゆっくのミャンマーがここから始まった。このユックリさには、慣れないと腹も立ちます。例えば、第5回目訪問の前年2002年11月始めに会員より寄付を受け文房具、衣類、団扇などダンボール箱23個を船便で送った。船で約25日かかりヤンゴンに予定通り到着。その後ヤンゴン郵便局でなんと30日間の税関検査、結局我々の2003年1月の訪問時にこれらの寄贈品をプレゼント出来ずに帰国。(その15日後にボランティアに荷物が渡った)ミャンマー人は待つことになれているか、それとも諦めているのか知らないが我々にはそんな感覚はありませんので何時もイライラのし通しです。

ビルマ語は難しい。中国語は4音あると言うが、ビルマ語は6音あるという、日本人の我々には全く聞き取れない。むろん文字も丸い文字で判読不能。そこで会話のためにネットで探した「指し会話帳」で会話。各イラストにビルマ文字と日本語が併記されているものだ。これで結構会話できる。「これ少し負けてよ」と言うビルマ語を指してこの会話帳を差し出す。するの店員がビルマ語の「幾ら？」と言うところを指し答える。後は簡単な英語で交渉する。同行した会員の娘さん達は、この会話帳で口から声を出さずに結構おしゃべりしていた。また、先々回よこれが、同行者田中氏の必携アイテムになり、至る所活用している。



ミャンマーの観光というと、パゴダ(仏塔)のみと言って良いかと思う。はじめの2~3箇所のパゴダは、それなりに見学しているが、あとは皆同じ様に見え、飽きてくる。また、おみやげ屋も何処も同じ商品が置いてあり目を引くものはない。



2000年~2010年訪問(第2~12回)  
会員 近藤正俊 君

私は市場見学が好きだ、市場は露天集合型と大きな建物内の多店舗型との2種類ある。どちらも好んでいく、別に買い物をするわけではないが、庶民の生活を目と臭いで感じるから見ていて飽きない。猛烈に臭う魚屋の隣に小さいな貴金属店が臭いを気にせず営業している。日本にも昔この寛容さはあったと思う。見慣れない野菜や果物を見つけると楽しくなる。お菓子などパッケージに意味不明の日本語文字が書かれた中国産のものがあり驚かされる。それと、値段も驚くほど安い、ほとんど中国製で粗製濫造に近いものばかりと感じる。Tシャツなど10枚で500円、ボールペン10本80円、驚く値段、多分一回で使えなくなるだろう。だからミャンマー人は、良質な日本製品を好む。また電気製品は高いが品質の良い日本製がよく売れている。中古衣料も日本製が多く売られている。多分廃品回収で集めたものが流れているのだろうか？日本語で学校名の入ったジャージや体操服もあり堂々とそれらを着ている人も多い。



ファッションなど無関係な国だ。いやこれがニューファッションかも？



ミャンマーの人たちの服装は、男も女もロンジーという巻きスカートがほとんど。最近ヤンゴンでは、男がズボンを履くようになってきているが、女はロンジー以外見られない。トイレのないところ(野外)では、小の方でも男は座って用を足す、一見「大」をしているように見える。だが郊外では野外の立ちションは注意が必要。サソリがいるというので、我々は出るもの

も出ない。

つい最近まではロンジー着用時は日本の着物と同様に下着は着けなかったようだが近年は着けるそうだがこのロンジー、一着オーダーでも綿製は500円もしない。私も一着持っている。夏の暑い日は快適で、短パンよりも涼しい。

ビルマ語で名前のことを「ナメー」というそうだ。ミャンマー人の名前は、姓はなく名のみだ。生まれた曜日に因んだ名前を付ける。だから名前で、生まれた曜日が分かるそうだ。

月曜日(例)kyaw(チョウ)Khine(カイン)Gyi(チー)khin(キン)等

火曜日(例)Saw(ソウ)Soe(ソー)Zaw(ゾウ)Nyaing(ニヤイン)等

よって、似た名前が多く、日本人の我々は時々混乱する。

ケースバイケース。また家族の絆について言えば、姓というものが存在しなくても、これは日本以上に強いものがあるようだ。でも、一族を表すファミリーネームがないのは、なぜだろう？ 一度調べてみたい。

ミャンマーの国土は日本の1.8倍、人口は4900万人、だからまだ未開の土地は広大にある。それも平原なので見渡す限りの原野だ。所有は国だが一定面積以上開拓すれば国より払い下げ可能という。農地は田んぼ



1枚200m×500mの単位面積で耕作される広いものだ。主に米作が多いようで土が肥えてないから一期作、耕耘機もコンバインもない。機械化していないからすべて手作業、気の遠くなるような農作業だ。雨期にはたびたび有る洪水で農地に被害も多いと聞いた。広いから復旧は苦労だろう。

ミャンマーを代表する、エーヤワディー川(日本ではイラワジ川と言っている)は、本当に広い。ミャンマー北部を走るヒマラヤ山脈の南部から流れ出し、ミャンマー中央部を北から南へ2400km流れ、アンダマン海に注ぐ。乾季から雨季では水位が10m近く上がり、水上交通の大動脈にもなっている。また数少なくなった川イルカ(イラワジ・イルカ)の生息地としても知られている。寛大且つ偉大な川、これが本当の「大河」と言えよう。

ミャンマーの食について語ろう。首都ヤンゴンには、和食、インド料理、タイ料理、中華料理、イタリア料理など何でもあり楽しむことが出来る。さすが首都だけ有る。しかしヤンゴンを離れた地方では、ミャンマー料理だけになる。このミャンマー料理は、一般的に脂っぽく、香辛料、ニンニクを使い、中年の日本人には、馴染まない。ミャンマー料理と中華料理を食べ比べると中華の方がさっぱり



味に感じるくらいミャンマー料理は脂が多い。油は料理により 1. ラード、2. ピーナツ油、3. ゴマ油、4. ココナッツ油(輸入品)5. ひまわり油。を使うようだ。食べ慣れない油なので余計に馴染まないのだろうか？

だが二品だけミャンマー料理でお薦めできるものがある。それは、朝食に食べる「モヒンガー」だ。米でできたヌードルを、魚を発酵して作ったナンプラーという醤油ベースのスープに入れ、魚や鶏肉などトッピングしたものだ。これはさっぱり味で、なかなかイケル。あとは、お馴染みの「チャーハン」、長粒米にチャーハンは最適。どの店も旨いと感じる。

尚、食肉は、鶏肉が多い。一般的に牛肉は硬くて食べられない。多分太った牛がないのか、食肉用の牛でなく、農作業のやせた牛なのか？ともかく牛肉は期待しない方が良い。豚肉もあり見かけない。

ミャンマー料理に飽きた後に海鮮料理を食べたいが、ここでは無理だ。なぜなら、魚、エビは、全て川魚、海魚はない。海に近いヤンゴンにもない。多分冷蔵設備や技術が遅れてるし停電も多いので無理なのだろう。こんなに油を多く使う料理が多いのに肥満した人は少ない。しかし一部の金持ちはデブが多い。デブは

富裕層の象徴のような体型ともなっている。ヤンゴンで食事を楽しむなら中華料理だ、フカヒレなどの高級食材はないが、ピータンや飲茶など本当に安く食べることが出来る。経営者は主に中国人のようだ。また、インドに近いのでヤンゴンにはインド人街がある。カレーもイケル。野菜カレーやチキンカレー本当のカレーはこんな味だったのかな？ 暑い国は、辛いものが好まれるようだ。

果物も豊富にある。バナナでも黄、赤、黒と十数種類あり、スイカやパパイヤも安い、雨期には、とても美味しいと有名なマンゴー、ドリアン、ジャックフルーツなど取れる。マンゴーを食べに雨期に一度ミャンマーへ行きたいと思う。只、イチゴは日本のものの方が数段おいしい。ミャンマーのイチゴは、原種に近く、堅くて甘くなく、とても小さいものなのでお勧めしない。



ミャンマーの通貨はkyat(チャット)、現在紙幣のみ、硬貨はあるらしいが流通していないし造幣もしていないようだ。この紙幣がくせ者で古い紙幣が多く、臭いも強烈だ。排泄物と同じ臭いだからたまらない。加えて紙幣が最高額で1000チャット(100円相当)だから10万チャット(1万円相当)だと100枚、500チャット札で200枚、とてもかさばり財布には入らない枚数。

金持ちは、10万チャット単位に輪ゴムでまとめ、カバンに入れ持ち運んでいる。銀行を信用しない大多数の国民は、本当の意味でタンス預金らしい。よってもちろんクレジットカードは使用できる国ではない。



第1回目の為替レート\$1 = 350kyat,  
第8回目の為替レート\$1 = 1,130kyat

インフレが激しいので国民の生活は苦しくなる一方。そのため毎年犯罪が増加しているらしい。

特に、スリの被害が増大していると聞いた。バスとか船、電車など人混みの中で被害に遭うという。カバンをカッターで切り、そこから現金だけを抜き取るという悪質で恐ろしい手口だ。ただどこかの国のように毎日起こる血なまぐさい事件は少ないようだ。これも敬虔な仏教徒の多い国民性だろう。

国民性と言えば、世界三大仏教遺跡と言われるカンボジアのアンコールワット、インドネシアのボロブドゥール、そしてミャンマーのバガンがある。前述の二者は世界遺産として認められているが、バガンは認められていない。その理由、国民が遺跡を勝手に自由に修復するため過去の物と異なる物になってしまっている。つまり復元とか修復でなく素人が補修したため世界遺産の認定が取れないとのこと。ミャンマー国民の人柄が出ている。なにかホノボとした空気が伝わってくるようだ。





バガンの日の出と夕日は素晴らしい。遺跡とパゴダしかない田舎なので空気が綺麗で邪魔する建物もないため「日の入り」は見る価値がある。今まではパゴダに上り夕日を見ていたのだが2005年10月に国

策により遺跡が一望できるよう展望用タワーを建築した。広い遺跡の中に建設したため、小生当初はそんな無粋なものを見たも無いと思っていたが2006年2月訪問時にその展望タワーに登った。タワーからバガン全体を見ることができ、また、無粋なタワー内には前面ガラス貼りのレストランからビールを飲みながら夕日が独占でき、観光客にはベストスポットと感じ始めた。

2005年8月 ミャンマー政府は突然ガソリン価格を8倍に値上げした。もともとガソリンは配給制であるが闇価格も当然8倍に、全ての物価に影響し始めた。2006年訪問時、ヤンゴン市内の車がどこどなく少ないように感じるくらいガソリンの値上げが庶民の生活に大きく響いているようだ。これによりインフレにも拍車がかかり、「微笑みの国」はどうなるのだろうか？

粗悪ガソリンでヤンゴンの街は臭い、停電は日常茶飯事、飲み



水もミネラルウォーターしか飲めない、標準時報もなく、時間はいい加減、衛生観念などない国ミャンマー。私はこの国に7回も行った。なぜだろうか？ 自分でもわからない。

平成17年8月にキョーキョーモー氏の両親が来日し、彼の住居(横浜市)を起点に両親は長野県、愛知県、奈良県、福井県など精力的に観光し約1ヶ月間滞在した。藤江会長の招待で当クラブ例会にもゲストで来た。そこで日本の感想を聞か初来日の母親は、「日本には田舎がない」という。ミャンマーの田舎は、広い平原に未舗装の狭い道路が続き、ぼつりぼつりと民家が点在、高床式の木造住宅に数匹の家畜がいて、自給自足の生活。日本はどうか？道路は舗装、ども住宅はキレイな屋根や外壁、集落内の道路は、全て舗装道路で自動販売機が至るところにある。そんな風景に、田舎がないと思ったんだろう。又、「日本の橋は綺麗だ」とも言っていた。そういえば、日本の橋梁は欄干にオブジェなどありデザインにも金を掛けている。だがミャンマーの



橋は、飾りもないちょうど日本のローカル鉄道の古い鉄橋のような感じだからそう思ったと推測する。また、私が父親に贈り物をしたいと申し出ると、ミキサーと電話機と返事が来た。ミキサーで乾燥エビを砕き食するそう。加工食品が少ないことが分かった。電話機は電源の要らないものを指定、停電が多いので電源は不要とのこと。電気事情の悪さがよく分かる。よって私には安価のもので助かった。別日にモー氏より両親が和風ドレッシングが気に入ったとの情報も得ていたので、後日、数種類のものも差し上げた。帰国時にお土産が多すぎて苦勞したようだ。私はミャンマーのホテルでも生野菜などサラダ類は食べたことがない。水が悪いから多分作らないのだろうか？ さて、あのドレッシングは何に使うのだろうか？

親切でやさしい人々が多く暮らすミャンマー。政治的には多々あることは承知しているがそれらを今言わないでおこう。そういえば、この国には東南アジアのどの国の首都にもある歓楽街というものが見当たらない。よって毎夜ホテルのラウンジでいつものおじさん同士の歓談で夜は終わる。

本当に、ミャンマーのナイトライフは寂しい。

仏教信仰に熱心なミャンマーの人々の楽しみは、現世のはるかかなたにあるのではないかと考えてならない。

(2006年記)

myanmar girl



## 不思議な国ミャンマー、 まだまだ見飽きない。





# 沈黙のミャンマー

「微笑みの国」だが今、国民は無言の抵抗をしている。

編集/発行：ミャンマーを愛する

発行日：2007/10/23

## 自由へのメッセージ

外を戦車が走っていないことだけを取り上げて、この国に問題がないなど言うことはできません。街に戦車の走る国は世界にそうはありません。にもかかわらず多くの国で人々の基本的権利が尊重されていないのです。（アウンサンスーチー）

国民を守るための軍隊が、丸腰の国民に銃口を向け銃弾を発射した。治安部隊と称する第66師団は、本当に貧しい少数民族の兵士を集めた部隊で宗教も民族も異なる部族。だから僧侶や一般市民にも銃を乱射した。もはや、恐怖政治と言っても過言でないミャンマーの軍事政権。

## 軍事政権

軍政トップのタン・シュエ議長

絶大な権力、逆らう者は失脚

2007年9月29日配信 産経新聞

ミャンマーの軍事政権は、最高意思決定機関、国家平和発展評議会（SPDC）のタン・シュエ議長をピラミッドの頂点とする厳格な縦社会からなっている。議長の決定は絶対といわれ、過去、議長の不興を買い、汚職などの罪を問われて失脚していった軍政幹部も少なくない。

「ミャンマーでは法律は重要ではない。何でも議長の考え次第だ」。地元紙の記者がこう指摘する通り、「タン・シュエ議長の支配体制は盤石」（ヤンゴンの外交筋）とされる。同記者によると、最近2～3年で、議長の逆鱗（げきりん）に触れ、汚職などの罪を問われて収監された軍人や政府職員は1000人を下らないといわれる。



タン・シュエ議長の絶大な権力を最も象徴する事件は、2

004年10月、軍政内部で比較的、穏健派とされた当時のキン・ニユン首相（序列3位）の失脚劇だった。軍情報局のトップを兼任していたキン・ニユン氏は、不正蓄財や、軍幹部の秘密情報を握っていたことが議長やマウン・エイ副議長（序列2位）の怒りを買い、汚職罪などで懲役44年の刑を受けた。キン・ニユン派人脈は徹底的につぶされ、情報局そのものも消滅した。

キン・ニユン氏の失脚後、軍政指導部は民主化勢力への強硬派で固められている。序列3位のトゥラ・シュエ・マン陸海空軍作戦調整官は議長の右腕とされ、将来の後継者と目されている。同4位で入院治療中のソー・ウィン首相は2003年に民主化運動指導者アウン・サン・スー・チーさんの拘束を直接指揮したとされる。

ミャンマーでは、軍が中心となり、英国の植民地支配を脱し独立を勝ち取った歴史がある。しかし、その後、軍は政治に関与するようになり、ネ・ウィン将軍（のち大統領）は26年にわたって「ビルマ式社会主義」を掲げ独裁体制を敷いた。ネ・ウィン氏は1988年、国民の大規模な民主化デモで辞任するが、軍は国民のデモを武力で弾圧し、再び軍政を敷いた。国民の言論や政治活動を厳しく制限する軍の存在は、今では市民の怨嗟（えんさ）の対象でしかない。（岩田智雄氏）

## 鎮圧部隊の国軍兵士

日本人女性2人が9月29日午前10時過ぎ（ミャンマー現地時間）、27日に日本人映像ジャーナリストの長井健司さんがミャンマーの兵士に銃撃された場所を訪れ、献花したという。

長井健司氏を銃撃した兵士は、小柄でゴム草履を履いている。ミャンマー人は一般的にゴム草履を履いているが、鎮圧部隊の国軍兵士が軍靴ではなく、ゴム草履を履いている点には違和感がある。小柄な兵士たちの風貌からは、貧しい地方の出身者であるように感じる。しかし、命令無くして銃は、撃たない。



1988年の民主化運動の際、ヤンゴンの鎮圧にあたった部隊は、チン州など貧しい地域出身の少数民族兵士だったと聞いたことがある。ミャンマー国軍には、少数民族の軍

# 軍政トップ

編集/発行：ミャンマーを愛する  
発行日：2007/10/23

は、自身の出身の地域ではないところに派遣されてきた。少数民族の多い各州にはその少数民族の反政府武装勢力があり、同じ少数民族同士が殺し合うことを嫌がる心理が働くからだ。

ウワサでは、少数民族の囚人を雇い治安部隊に仕上げたという情報もある。チン族・カチン族・カレン族などの少数民族にはキリスト教徒が多い。僧侶に対する弾圧のために、異なる宗教を信仰する兵士を一部投入している可能性がある。

イラワジの報道によると、軍事政権トップのタンシュエSPDC議長とナンバー2のマウンエー副議長の間でデモ鎮圧をめぐって意見の対立があるという情報も出ている。また、バンコクの西側外交官筋の情報として、マウンエー副議長が近いうちにスーチー女史と面会するという情報も出ている。

確認がとれた情報ではないが、もし事実であるならば、2004年のキンニョン首相更迭時のような事態が起こる兆候かもしれない。

[内容が重複するが、あるブログにもこんな記事が・・・]  
ビルマの正規軍なら普段から軍靴を履いています。今回の治安部隊がゴム草履なのは履きなれている軍靴を持っていないか、あるいは支給されたが足に合わなかったものと考えられます。また制服に折り目がついていることが不自然です。つまり少数民族兵士を急いで編成し派遣したのではないかと推察するのが自然ではないでしょうか。

また襲撃された僧院の僧侶の証言にもあるように完全なビルマ語を話さなかったとありますが、このことから彼らがビルマで正規な学校教育を受けることが出来ないくらい辺境の地に住んでいたということが推察できます。

以上、あるブログより転載。

## 謎に包まれた

### ミャンマー軍政のトップ

ミャンマーの軍事政権が首都をヤンゴンから同国中部の森林地帯ネピドーに移してから、その実態は謎に包まれたままだ。

現在、実験を握る軍政は1988年9月、タン・シュエ議長らが率いる軍部が独裁体制を敷いたネ・ウィン (Ne Win) 将軍へのクーデターを決行。1992年にタン・シュエ議長が軍政トップに就いた。それ以来、ミャンマー軍事政権は秘密主義的な政治を貫いている。早くから軍人としてのキャリアを築いてきたタン・シュエ議長は心理戦部隊に所属した経験を活かして、民主運動家アウンサンズーチー (Aung San Suu Kyi) 氏や、その他のライバルを排除してきた。専門家によると、タン・シュエ



議長は軍事的な戦略やミャンマーの伝統に加え、占星術などのオカルト的な思想に基づいて政策を決定するため、その行動は予測しがたいという。

首都移転の際のエピソードがその典型的な一例といえるだろう。2006年11月7日、タン・シュエ議長は占星術のお告げがあったとして、突然、ミャンマー中部の森林地帯にあるピンマナ周辺に首都を移すことを宣言。官僚らは数時間以内に荷物をまとめて、移動するよう求められた。しかし、ネピドーと名づけられた新首都は、まだ水道や電気といった基本インフラも整備されていなかったという。



外部から隔離されたネピドーの官庁施設は謎に包まれている。時おり外部に流出するビデオ映像などから、タン・シュエ議長の娘の結婚披露宴でダイヤモンドを身に着けた花嫁

や豪華マンションなど、ミャンマー官僚の贅沢な生活の一端を知ることができる程度だ。

評論家によれば、タン・シュエ議長が首都を山奥に移設した理由の1つは、都市部の抗議デモを避けるためだという。

国家平和発展評議会 (SLORC) が、1988年の社会主義政権崩壊に対する反応として作られた時、タン・シュエは21人のメンバーのうちの1人として指名され、ソウ・マウン将軍の片腕になる。その後、1992年4月23日、健康上の理由によるソウ・マウンの辞任に伴い、SLORC議長 (国家元首)、国防相、国軍最高司令官として彼の後継者になりSPDCの議長としての任命された。

近年、タン・シュエ氏は国家平和発展評議会 (SPDC) 議長の辞任の準備をしていて、すでに、国軍最高司令官であるトゥラ・シュエ・マン大将に、かなりの権限を委譲し始めているというウワサもある。

なお、大規模なデモが始まった26日、ミャンマー中部の新首都ネピドーにある空港からタン・シュエ議長の妻と子どもたちはチャーター機で出発し、ドバイに入国。現在も高級ホテルに滞在中と報じられている。また、ネピドーでは議長自らが、空港で家族を見送った模様。

## 【タン・シュエ議長の略歴】

- 氏名 タン・シュエ  
(Chairman of the State Peace and Development Council, Senior General Than Shwe)
- 生年月日 1933年2月2日生
- 出身地 チャウセー  
(中部ビルマの稲作地帯)
- 現職 国家平和開発評議会 (SPDC) 議長



# 多民族国家

編集/発行：ミャンマーを愛する

発行日：2007/10/23

(国家元首) 首相、国防相、国軍司令官

5. 学 歴 高等学校卒

6. 職 歴

1948年 高校卒業、郵便局員

1953年 国軍幹部候補生学校入校

1970年 第1連隊長

1983年 南西軍管区司令官

1986年 陸軍司令官

1988年 国軍クォーター、  
国家法秩序回復評議会  
(SLORC：97年にSPDCに改組) 委員

1990年 SLORC副議長、国軍副司令官、  
大将に昇進

1992年 SLORC議長、首相、国防相、  
国軍司令官に就任

1993年 上級大将に昇進

1997年 国家平和開発評議会議長に就任  
(首相、国防相、国軍司令官兼任)

2003年 首相を退く  
(国防省、国軍司令官はそのまま兼任)

昨年、独裁者タンシュエの娘が出来ちゃった婚での結婚式を、国の迎賓館で行った時の超豪華結婚式映像が流れています。政商からの豪華な貢ぎ物ばかりだよ。

噂では出来ちゃった婚の子供はモト彼の子で、それに落胆した新郎は慰謝料代わりにシンガポールの駐在武官のポストをもらったそうです。

## 新憲法草案

ミャンマー軍政、新憲法草案で自治権と引き換えて、少数民族押さえ込み

僧侶らによる反政府デモを「制圧」したミャンマーの軍事政権は、民主化勢力と並ぶ、もうひとつの大きな「敵」である少数民族の動きも押さえ込んだ。一時は10万人規模に拡大したデモが、急速に勢いを失った背景には、歴史的に民族解放を求めて闘ってきた少数民族のほとんどがすでに軍政側に取り込まれ、一大勢力として結集できなかったことも要因のひとつにある。

ミャンマーは人口の約6割強を占めるビルマ族をはじめカレン、シャン、カチンなど少数民族から構成され、細分すればその数は、150を超えるとも言われる。1948年の独立後、ミャンマーでは多くの少数民族が独立を目指して各地で蜂起し、深刻な状況に陥った。軍事政権が成立した1988年には、17の少数民族武装勢力が反政府闘争を展開。軍政にとって、大きな脅威になっていた。

軍政はこれらの少数民族に対して弾圧を進める一方で、「和解工作」を展開。89年、コウカン族と停戦協定を締結したのをはじめワ族、カチン族などと次々に交渉を進め、95年までに南東部の主要民族であるカレン族をのぞき、ほとんどの少数民族勢力と停戦を結んだ。

今回、発生した大規模デモでは唯一、残ったカレン族の武装勢力、カレン民族同盟 (KNU) が、軍政との停戦協定に応じている他の少数民族に共闘を呼びかけたが、これに呼応する勢力はなかった。



軍政はさらに、国営メディアを通じて、少数民族が軍政側に立ったことを強調。「カチン州では10万人以上が(親軍政)デモに参加した」と報じた。「少数民族が結集することを警戒し、動きを分断する工作を展開した」と

消息筋は分析する。

ミャンマー観測筋は、少数民族の積極的な関与を思いとどまらせている理由として指摘するのが、9月3日に終了した国民会議によって採択された新憲法草案の基本原則の内容だ。

「シャン州のパオ族は国民会議終了後、自治権を約束されたと喜びの思いを知人に語った」といい、民主化プロセスの過程で少数民族の中には軍政側から自治をほめかされている可能性を指摘。すでに少数民族が反軍政として市民や僧侶と呼応する土壌は失われていることを示唆している。

※以上は、あるサイトに掲載されていたものだが、軍政は少数民族を巻き込んだ政策をしている。しかし、民主化になるとこの少数民族との乖離が生ずることは間違いない。火種は尽きない。

軍事政権が先月26日、反政府デモへの武力弾圧に踏み切ってから10日が過ぎた。最大都市ヤンゴンでは完全にデモが押さえ込まれ、表面上は以前の市民生活に戻りつつある。

ただ、現地からの報道によると、デモ参加者などの検挙がままなお行われ、街に笑顔は見られない。一方、拘束された僧侶がハンガーストライキを断行したり、一部市民が国営放送の視聴を拒否したりするなど、軍政に対する“無言の抵抗”が続いているもようだ。

(記 2007年10月)

# “ドル箱” 天然ガスが逃げ道

## 多民族国家

ミャンマーは多民族国家であり、150民族がいる。

ミャンマーには大きく分けて8つの民族があり多数民族はビルマ族である。各民族はさらに細かく分類され、カチン族は12、カヤー族は12、カイン族は9、チン族は51、バマー族は9、モン族は1、ラカイン族は7の支族からなっている。インドからミャンマー西部の山岳地帯に住み首狩りで知られるナガ族はチン族の支族とされている。

平野部にビルマ族、山岳部に各少数民族が住む。各民族は言語学系統によってチベット・ビルマ語族、タイ諸語、オーストロアジア語族、オーストロネシア語族に分けられる。

### 人種・民族

ビルマ族	68%
シャン族	9%
カレン族	7%
ラカイン族	4%
中国系	3%
インド系	2%
モン族	2%
他	5%

言語：ビルマ語  
(公用語)

少数民族諸語  
(シャン語、カレン語など)



行政は、7つの管区(タイン)と7つの州(ピーネー)に分かれる。

管区は、主にビルマ族が居住する地域の行政区分。

州は、ビルマ族以外の少数民族の居住地域で、自治権が認められている。

ミャンマー(ビルマ)国民の大多数が信仰する上座仏教に対し、キリスト教や土着信仰を重んじるカレン族、イスラム教を進行するインド系の移民たちは軍事政権と激しく対立したり、迫害されて難民として国外に流出したりしている。

## 《経済制裁：軍事政権

### “ドル箱” 天然ガスが逃げ道》

ミャンマー軍事政権による旧首都ヤンゴン市内の反政府デモ武力弾圧で日米欧などが新たな経済制裁に動く中、日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所は9月2日、中国の



支援や天然ガス輸出による外貨収入などを理由に「ミャンマーは経済危機には陥らない」として、これら制裁発動の実効性は薄いとの見方を明らかにした。僧侶や市民らによる反政府デモの背景にコメや食用油など生活用品の高騰があったことも改めて指摘した。

同国の家計支出に占めるコメの割合は一般的に約2割、食用油が1割と高い比率にある

食用油はミャンマーの家庭料理に欠かせぬ食材であり、低所得層になるとこの2品目で家庭支出の半分近くに達するという。昨年5月以降、30%を超える価格上昇が続くコメや、昨年12月ごろから3月にかけて一気に50%以上の高騰となった食用油、さらにガソリン価格の値上げなど厳しい生活環境への不満が、反政府デモにつながった。

問題の中国は、2006年に公表されているだけでも2億ドル(約230億円)の優遇借款をミャンマー軍政に供与。発電所などのインフラ整備のほか、民間案件の形で中国向け石油・ガスパイプラインの建設を進めている。エネルギー資源確保を狙う中国が、ミャンマーの天然ガス資源を狙って軍政と経済を支えている側面がありそうだ。

ミャンマーで天然ガスの生産量が増え始めたのは2000年以降だ。タイ向けに天然ガスの輸出を始めた。その外貨はミャンマー軍事政権の懐を十分、潤した。さらに刺激的な発見が2004年にあり、軍事政権から権益を獲得した韓国の大宇インターナショナル(が新たな天然ガス田を発見したので)。

ミャンマーの天然ガス田はベンガル湾のミャンマー領海に広がっているが、2004年に発見された鉱区は、ミャンマーの北部、バングラデシュの領海に近い沖合で、シュウェ(Shwe)と呼ばれている。当初、シュウェの天然ガス埋蔵量は4~6 tcfと推計されていたが、その後、新たな鉱区が発見され、最近では5.7~10.0 tcfあると見られている。

※国民は、生活に苦しんでいるが軍政幹部は、懐が豊だ。中国だけでなく最近、インドにも利権を与え、益々、懐が膨らんでいるらしい。それが証拠に、米国にある多額の資産が凍結された。

編集/発行：ミャンマーを愛する

発行日：2007/10/23

# 本報告書作成に当たって

まず始めに、岡崎城南ロータリークラブの1999年から継続されているこの世界社会奉仕活動ミャンマー教育支援プログラムは、偏に岡崎城南ロータリアン全員のご理解と温かい支援により遂行できたことに心より感謝とお礼を申し上げます。

また、歴代の会長、幹事、国際奉仕委員長、WCS委員長並びに委員の皆様、目標の「ミャンマーに5館の図書館KIBOH」を達成することが出来、現在は医学生達への奨学金支給で教育支援に対し拡充しています。

当クラブの奨学金制度KIBOH奨学会では2009年より毎年2名の医学生の支援を継続し、加えてクラブメンバー有志の奨学金制度「あおい奨学会」からと併せて既に計9名の医師が誕生しました。心よりの支援についてのご協力有り難うございます。

併せて、自費の訪問にかかわらず、数度も現地に赴てくれた訪問メンバーにも、厚く感謝したいと思えます。そして我々の無理な要望や面倒な依頼も断らずこの事業のコーディネーターや現地手配などしてくれ、またミャンマーの訪問に必ず毎回日本から同行してくれる京 幸一氏(キョーキョーモー氏)及び奥様のゆり夫人(カインカインシュエさん)にも感謝します。この紙面を借りお礼申し上げます。

現在ミャンマーに建設した5つの図書館KIBOHは、図書を含め地元数千人の小・中・高校生の児童生徒に利用されています。また、多くのメンバーからの文房具、衣服などの寄贈品は、現地ボランティア婦人グループから経済的に恵まれない数多くの子供達に公平に配られ、我々の心が彼らに届いています。

また、我々の奨学金で卒業した医師達も地域医療に従事し、多くの貧しいミャンマーの人々の健康管理などで活動し、彼らの手で我々の奉仕活動が果実となっています。

当初からこの事業に「まず我々で出来ることから始めよう!」「力まずにやろう!」「継続することが重要!」と心を合わせ、肩の力を抜き、その結果、回数を重ねることが出来ました。我々の出来る範囲内で無理をしないことが事業継続の原点でした。

毎年ミャンマーを訪問しているメンバーたちが何時も感じることは、ミャンマーでは人も時間も物も全てゆっくり動いているような感覚を得ます。、しかもミャンマーの人々の笑顔は、あわただしく暮らす我々にとって心暖かく、時を過ごさせてくれるようにも感じます。クラブを代表して数回そんな国に赴くことが出来、幸運であったと言ってくれたことに心が和みます。

ここにミャンマー教育支援事業を総括するためにこの事業報告書を作成しました。今後も当クラブのWCS活動に会員皆様の暖かいご理解ご支援をお願いし報告とさせていただきます。

2012-2013年度  
国際奉仕委員会  
WCS委員会



【発行】初 版：平成17年9月20日

第二版：平成22年3月12日

第三版：平成24年9月19日

第四版：平成25年2月 7日

【発行者】 岡崎城南ロータリークラブ

〒444-0052 岡崎市康生町515-33

岡崎ニューグランドホテル内

TEL 0564-26-2666 FAX 0564-26-2667

<http://okazaki-johnan-rc.net/>

Email: [info@okazaki-johnan-rc.net](mailto:info@okazaki-johnan-rc.net)

【編集責任者】 2012-2013年度

国際奉仕委員長 近藤正俊